

533

174



始



小林一郎著

法華經
と
日蓮上人

大正
13.12.15
内交

内外出版株式会社發行

内務省
13.12.8
正本

序

日蓮上人の遺文集をはじめて手にした時から、數へて見れば既に二十年になる。日々の事に追はれて居て研究も、また信仰も更に進まぬけれども、上人に對する渴仰の念は益昂まるのみである。又思慮も分別も足らぬ自分が此の二十年間、極めて僅かながらも世の中に貢献し得たことがあるとすれば、自分は日蓮上人の遺文集の感化に負ふ所の多いことを感謝しなければならぬ。此の小著はいふに足らぬものであるが、之によつて自分と志を同うする人を、たとへ一人なりとも作ることが出来るならば、まことに望外の幸といふべきであ

る。深草の元政上人は其の弟子に誨へて、

嗚呼識淺きも尙ほ跋つ可し、性敏なるは尤も之を勗めよや。

といつた。自分はたゞ諸君子の鞭撻と指導とを望んで已まぬ者である。

大正十三年九月

小林 一郎

例言

一、日蓮上人の一生は即ち法華經の行者の模範である。たとへ法華經に就て何等の理解のない者でも、上人の事蹟を知つて何の感激をも覺えぬといふ者はあるまい。此書の編述もまた斯る感激の餘に出たものである。

一、日蓮上人は法華經の行者として終始したのである。されば法華經に就て全く知る所が無くては、上人が何のために身を惜まらずして奮闘したかを解することは出来ぬ筈である。此書の中に教義上の解説の多く出たのも、亦た已むを得ぬことである。

一、日蓮上人は自ら一宗一派を開く考へではなかつた。唯だ釋尊の吾等に遺されたる教を、釋尊の御本意の如く世に弘めんことを畢生の志願としたのである。是れ本書に大乘佛教の大體を説述する必要がある所以である。

一、執筆の半に及んで、あまりに長くなりはせぬかといふ懸念を生じたので、後半は成るべく簡要を旨とした。之が爲に前後不調和の様な體になつたのは著者の恐縮に堪へぬ處である。

一、經文其他引用したる語の中で、漢文のものは皆之を假字交りに改めた。是は研究の初歩に在る人のために便宜を謀つたのである。但し之が爲に漢文特有の氣力精彩等の失はれたのは、據ないことである。

一、言語を成るべく簡明にするために、佛と皇室とに對する外は凡て敬語を省いた。けれども日蓮上人に對する著者の崇敬の情は、讀者の言外に於て諒解せらるゝ所であらうと確信する。

一、著者は今なほ研究の半途に在る者である。本書にも數限りない誤謬の見出さるゝことであらう。江湖の諸君子が之に對して叱正を惜まれざらんことを切望して已まぬ次第である。

著者再識

目次

| | |
|-----------|-----|
| 一、日蓮上人の時代 | 一 |
| 二、法華經の流布 | 二〇 |
| 三、日本國の諸宗 | 四三 |
| 四、法華經の行者 | 七一 |
| 五、折伏逆化 | 九五 |
| 六、日蓮が弟子檀那 | 一一六 |
| 七、立正安國 | 一三九 |
| 八、廣宣流布の時 | 一六〇 |
| 九、不惜身命の人 | 一八三 |
| 一〇、日本國の存亡 | 二〇三 |

二

- 一一、數々見擯出……………三四
- 一二、第一に富める者……………三四五
- 一三、一閻浮提第一の本尊……………二七三
- 一四、釋尊の教化……………三〇四
- 一五、大乘教と小乗教……………三三三
- 一六、菩薩の道……………三四八
- 一七、法華經と諸經……………三八二
- 一八、五時八教……………四〇五
- 一九、本迹の二門……………四三二
- 二〇、久遠の本佛……………四五二
- 二一、一念三千……………四八〇
- 二二、妙法蓮華經の五字……………五一〇

法華經と日蓮上人

小林 一郎 著



日蓮上人の時代

法華經の行者を以て自ら任じたる日蓮上人は、佐渡塚原の雪の中で其の志を述べて、善につけ惡につけ法華經をすつるは地獄の業なるべし。大願を立てん。日本國の位をゆるらん、法華經をすて、觀經等について後生を期せよ。父母の頸を刎ねん、念佛申さずば。なんごの種々の大難出來すとも、智者に我義やぶら

一、日蓮上人の時代

一

れずは用ゐじとなり。——開日鈔

といつた。末世に出て法華經を弘むる者の身に種々の危難の加はるべきことは佛の豫め告げたまへる所である。法華經の勸持品には「諸の無智の人の惡口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者あらん」とある。また「惡口して瞋盛し數々擯出せられん」ともある。苟くも法華經の行者を以て自ら任ずる者は、最初から有らゆる危難にあふべき覺悟をもたなければならぬ。

日蓮上人は建長五年の四月、三十二歳にして初めて題目を唱へた。これが日本國に於ける題目の第一聲である。それは上人が自ら

日本國の中にたゞ一人南無妙法蓮華經と唱へたり。これ須彌山の始めの一塵、大海の始めの一露なり。——妙密上人御消息

といつた通りである。此より五十歳にして佐渡へ配流せらるゝ迄の間に、法華

經の中に擧げられたる諸難は残らず上人の一身に集つた。而も上人はいつの場合にも、

これには一定と本より期して候へば歎かず候。——富木殿御返事

といふ如き態度を以て之を忍受した。人情として誰も危難を悦び困苦を樂むものはない。然るに上人が之を忍受して敢て心を動さなかつたのは、其心に固く信ずる所があつたからである。信は凡ての力の本である。

一切の行は信を以て首と爲す、衆徳の根本なり。——梵網經

といふは貴い語である。然し堅固なる信心が容易に成立つものではない。輕々しく信ずる者はまた輕々しく其の信を抛つものである。日蓮上人が法華經の行者として世に立つたまでには種々の苦心を努力とが積まれたものである。

『智者に我義やぶられずば』の一語には、其の奉ずる所の主義が確乎たる根柢

をもつものであるといふ確信が現はれて居る。

信ありて解なければ無明を増長し、解ありて信なければ邪見を増長す。信と解と圓通して方に行の本となる。——涅槃經

とは名言である。實に日蓮上人の如きは信と解との圓通したる結果が現はれて其の行となつたのである。上人は安房の清澄山で得度したので、此の清澄山は天台宗の寺であつた。しかし上人は天台宗の僧となつたが故に法華經を世に弘めやうといふ志を立てたのではない。上人が此の志を立つる前には最も熱心なる研究が二十年ほども積まれたのである。

此度いかにもして佛種をもうゑ、生死を離るゝ身とならんと思ひて候ひし程に、皆人の願はせ給ふ事なれば阿彌陀佛をたのみ奉り、幼少より名號を唱へ候ひし程に、いさゝかの事ありて此事を疑ひし故に一の願を發す。日本國

に渡れる所の佛經、並に菩薩の論と人師の釋を習ひ見候はゞや。……枝葉まで習はずとも所詮肝要を知る身とならばやと思ひし故に、隨分走りまはり、二十六年の年より三十二に至るまで二十餘年が間、鎌倉と京と叡山と園城と高野と天王寺等の國々寺々、あらあら習ひ廻り候ひし程に云々。——妙法

尼御返事

とは上人が後に當時を回顧して語れる所である。

安房の小港の海邊で生れた上人は、十二歳にして清澄山に入り、道善房を師として十六歳の時に得度した。時は彼の法然上人が専修念佛を唱へはじめたら六十餘年の後で、念佛宗の勢は國の隅々にまで行き亘つて居た。其の勢に連れて何れの宗の寺でも彌陀の名號を唱ふるといふ有様であつた。それで上人も衆の爲す所に倣つて、名號を唱ふることを續けて居たものと思はれる。し

かし殆んど無意義に衆の爲す所に倣つて居ることは上人の如く人に優れた天分をもつて居る人の久しく堪へ得る所ではない。上人は自ら『いさゝかの事ありて』といつて居るけれども、實は大なる問題である。

苟くも出家して道を學ぶ以上は、世をも人をも導くべき身とならなければならぬ。他を導かんとする者は先づ自ら深く知り篤く信する者でなければならぬ。佛教を習はん者、父母師匠國恩を忘るべしや。此の大神を報せんには必ず佛法をならひきはめ、智者とならで叶ふべきか。譬へば衆旨を導かんには、生盲の身にて橋河を渡し難し。方風を辨へざらん大舟は、諸商を導きて寶山にいたるべしや。——報恩鈔

とは先づ上人の心に浮んだことであつた。清澄山は天台宗であつた。天台宗は法華經に依つて立つ所の宗である。然るに久しい以前から天台宗に於ては密教

を採り入れて、台密と稱し、大日如來を崇め尊んで居た。即ち

日本國は叡山ばかりに傳教大師の御時法華經の行者ましましけり。義真圓澄は第一第二の座主なり。第一の義真ばかり傳教大師に似たり。第二の圓澄は半ば傳教の御弟子、半ば弘法の弟子なり。——報恩鈔

とある如く、傳教大師が本朝に天台宗を弘めた時の精神は既に久しく失はれて居た。その上に又阿彌陀佛にも歸依するとなれば、信仰の根柢があまりに動搖を極むる次第で、

我等凡夫はいづれの師々なりとも信するならば不足あるべからず、仰いでこそ信すべけれども日蓮が愚案晴れ難し、——報恩鈔
といふは眞に道理ある疑問である。

天台宗の内部が此の如く紛雜である上に、世間を見ると天台宗以外になほ多

くの宗々が對立して居るのである。吾國に初めて佛法の渡つたのは何時の頃であつたか、明に知ることには出来ぬが、欽明天皇の御宇に百濟の聖明王より佛像及び經論を献じた時から數へても、日蓮上人の頃までには凡よ七百年を経て居た。其間に弘まつたものは凡て十宗である。先づ奈良の朝の末までに支那から傳はつたものが六宗ある。即ち小乗の教に於ては俱舍、成實、律の三宗。(勿論此中で俱舍と成實とは獨立しては弘まらず、他の宗の人々が兼學した。)大乘の教に於ては三論、法相、華嚴の三宗である。平安朝に入つて傳教大師が天台宗を弘め、弘法大師が眞言宗を傳へたので凡て八宗となつた。念佛の教は此間に於て傳はつたけれども未だ大なる勢力とはならなかつたが、平家の全盛時代に法然上人が出て淨土宗を開いてから年々に勢を増して來た。禪は奈良朝に傳はつたが世に弘まらずして終つた。然るに鎌倉時代になつてから榮西禪師が臨

濟の禪を傳へ、道元禪師が曹洞の禪を傳へ、其後支那から幾人かの高僧も來朝したので、漸次に勢力が盛んなり、殊に武家には禪門に歸依する者が多くなつた。斯くして日本國には十宗が對立して居ることになつた。

勿論此等十宗が皆同様の勢力をもつて居るだけでは無く、其中には全國を風靡するほどの勢のものもあり、又殆んど廢れてしまつたものもある。しかし其の勢力の多少によつて其の教義の勝劣を判することは出来ぬ。盛衰は時によつて變するが、道は萬古を通じて變らぬ筈のものである。

法に依りて人に依らざれば——涅槃經

とは釋尊の戒めたまへる所である。人々が其の信仰を決定する場合に、たゞ法の勝劣を考へて其の最も勝れるものに依るべきである。教を弘むる人や之に歸依する人の地位勢力等によつて動されてはならぬといふのである。されば彼の

十宗の何れに依るべきかを定めんとするには、其の盛衰如何に拘はらずその宗の教義によつて之を定めなければならぬ。但し十宗が同等のものとは考へられぬ。絶対の眞理は一でなければならぬ。最勝のものが二も三もあらう筈はない然るに

世間を見るに各我も我もといへども國主はたゞ一人なり、二人となれば國土おだやかならず。家に二の主あれば其家必ずやふる。一切經もまた此の如くやあるらん。何れの經にてもおはせ、一經こそ一切經の大王にては在すらめ。而るに十宗七宗まで各諍論して隨はず。——報恩鈔

といふ如き有様であれば、輕々しく去就を決定することは出来ぬわけである。殊に釋尊の御精神から考へて見ても、諸宗の對立といふ事の許されやう筈がない。釋尊は成道以後四十餘年の説法を續けられてから、靈鷲山に於て大衆に

對して、

諸の衆生の性欲不同なることを知れり。性欲不同なれば種々に法を説き。種々に法を説くこと方便力を以てす。——無量義經

とて、今までに説かれた所の種々不同であつたことを明されたが、其の種々不同なる所説は、要するに衆生を導いて一に歸せしめんが爲の方便であることを示された。されば

正直に方便を捨て但だ無上道を説く。——法華經方便品

といふと共に

十方佛土の中には、唯だ一乗の法のみ有り、二も無く亦た三も無し。——方便品と明言せられたのである。此の一語は釋尊御一代の説法が一に歸すべきものなることを示さるゝと共に、凡ての佛の教へらるゝ所が亦た同じく一に歸すべき

ことを示されたものである。釋尊によつて此の如く明言されてある以上は、其の佛法の末流が幾つにも分れたといふことが、たとへ已むを得ぬ事情によるとはいへ、いつ迄も其儘にして置かるべき筈はない。吾國には十宗が對立して居るのであるが、其内に釋尊の御本意に叶へるものが有るか無いか。若し有れば十宗中の何れであるか知りたいたい。若し無ければ如何なる教がそれであるか知りたいたい。之を知らずして佛弟子の名を冒すのは、自ら欺くものといはなければならぬ。日蓮上人は斯う思ひつめて、もはや一日も安閑としては居られなくなつた。

又上人の心を強く打つたものは、當時の日本國に漲り渡つたる不安の狀態であつた。京都鎌倉の合戦が鎌倉方の勝利に終り北條義時の計らひとして三上皇の御遷幸となつたのは承久三年の事であるが、上人の誕生はその翌年の貞應元

年である。其後殆んど天變地天の絶え間はなかつた。例へば嘉祥二年には（上人の五歳の時）六月に濃尾地方に雪が降り、七月には奥州に雨の如くに石が隕ち、鎌倉には霜が降つた。安貞二年には（上人七歳の時）京と鎌倉とに洪水があつて、溺れ死する者も多くあつた。寛喜元年には（上人八歳の時）諸國に大風洪水があつて收穫が少く同三年に至つては飢饉の上に疫病が流行し、八九月の間に京と鎌倉には大風洪水があつた。此時には令を發して京觀の窮民が家を壊して薪と爲すことを禁じたとある。以て其の慘狀を察すべきである。貞永元年にも（上人十一歳の時）また飢饉であつた。立正安國論は正嘉元年（上人三十六歳の時）の大地震に感ずる所あつて作つたといふことであるが、其の劈頭に近年より近日に至るまで天變地天飢饉疫癘、遍く天下に滿ち廣く地上に迷る。牛馬巷に斃れ骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半を越え之を悲まざる族敢

て一人も無し。

とある如く、久しい間慘狀が續いたのである。佛法の榮えて居る國は諸天善神も之を守護して、常に安穩であるといふことが諸經に見えて居る。然るに吾國に於ては朝家に於かせられても奈良朝以來佛法を崇められ、藤原氏や源平二氏もまた同様であつた。それで此の如き慘狀が續くといふのは不思議なことである。或は一般の信仰が佛意に叶はぬのでは無からうかといふ疑惑も起らなければならぬわけである。

更に痛感せらるゝのは有爲轉變の烈しい世の中だといふことである。佛滅後二千年を過ぎては末法の世に入るといふが、如何にも末法の世の世相があり／＼と現はれて居る。彼の藤原氏の榮華はいつ迄も續くものと思はれた。然るに道長が

此世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたることも無しと思へば

と詠んでから六十年ばかりで藤原氏の勢力は地に墮ち、院政の時代が出現した。しかし是も僅かに八十年ばかりで、院中で政を執られたのは三上皇にすぎず、政權は平氏に移つた。その平氏は二代にして亡びて源氏の世となり、源氏も三代にして亡びて北條が政權を奪つた。此等の事實を眼前に見ては、誰でも頼み難い世の中であるといふ感起さすには居られまい。況して其間には幾回となく戦争があつて、親は子を失ひ兄は弟を討たせ、一族盡く離散するといふやうな事は到る處に見られたのである。鴨の長明は世の中をはかなんで、

ゆく水の流れば絶えずしてしかも元の水にあらず、よごみに浮ぶうたかたは且つ消え且つむすびて久しくとゞまること無し。——方丈記

といったが、誰も同じ感起したことであらう。此の如き世に生れた者に眞の

慰安を與ふるものは、信仰の力より外にないわけである。いかに多くの經を讀誦しても、いかに誠心を以て佛に仕へても、此の多くの憐れむべき人々に眞の慰安を與へて其の苦を離れしむることが出来なければ、佛弟子として世に立つことは出来ぬものである。

一切衆生が異の苦を受くるは、悉く是れ如来一人の苦なり。――涅槃經
といふ大慈悲心を承け嗣ぐものでなければ眞の佛弟子とはいはれぬ。

彼此と思ひ合すると共に、十六歳の青年たる日蓮上人(當時の名は蓮長)は一日たりとも此儘に送ることが出来ぬと思ひつめた。釋尊の御本意に叶つた教はいかなるものであるか。又當世の凡ての人の惱みを救ふべきものは如何なる教であるか。此の疑問を釋き得るまでは、生命にかけて研究を續けなければならぬと決心した。しかし之が爲には十宗の教義を盡く究めなければならぬ。ま

た一切の經論を盡く讀破しなければならぬ。たゞ多く學び多く讀んだからとて、それで事の足るものではない。多くの中に就て其の最も肝要なるものを捉へなければならぬ。

但だ多聞を以て能く如来の法に入るにあらず、人の美饌を設けながら自ら餓えて食せざるが如し。人の藥を善くするも、自の疾を救ふ能はざるが如し。

――華嚴經

といふ戒めの如きは、何人も共に心に止めなければならぬものである。多く學び多く識つて、而も其の要を得るといふことは、尋常一様の人の能くする所ではない。而も之を困難なりとして躊躇して居るわけには行かぬのである。

清澄山には虚空藏菩薩の廟があつた。此の菩薩を念ずる者は、必ず深き智慧を具へ得るであらうと言ひ傳へられてある。

當に知るべし其人は虚空藏なり、常に空慧を以て衆生を觀するが故にの一千手經
虚空藏菩薩とは實相の慧藏、虚空の如きなり。——注維摩

此菩薩は如來の虚空に等しき慧を持す。——大日經

といふが如く、古來から種々に讚歎せられて居る。日蓮上人は此より徹底的な
研究に入るべく決心すると共に、此の決心を貫くには深き智慧を與へなけれ
ばならぬことを知つた。それ故に虚空藏菩薩の廟に日參して『日本第一の智者
となさしめたまへ』と祈願を凝したのである。日本第一の智者となつて佛法の
淵底を究め、而して日本國中の一切の人を救はうといふのである。

日蓮は安房の國東條の郷、清澄山の住人なり。幼少の時より虚空藏菩薩に願
を立て云く、日本第一の智者となし給へと云々。虚空藏菩薩眼前に高祖とな
らせ給ひて、明星の如くなる智慧の寶珠を授けさせ給ひき。其しるしにや、

日本國の八宗並に禪宗念佛等の大綱は、伺ひ侍りぬ。——善無畏三藏鈔

とは上人の自ら語る所である。

徹底的なる研究を思ひ立つた日蓮上人は天台宗の僧でも無ければ、阿彌陀佛
の歸依者でもない。何の挾む所もなく、たゞ釋尊の御本意はいづれに在るか、
今の世の凡ての人を救ふべき教は如何なるものであるかと誠心を以て求むるの
みである。此の如き態度を以ての研究が三十二歳の時まで續いたのである。然
る後に自ら法華經の行者たるべき覺悟を定めて起つたのである。『智者に我義破
られずば』の語あるもまことに偶然ではない。

一、法華經の流布

曆仁元年、日蓮上人は十七歳になつたが、前年から思ひ立つたる研究の途に上るべく決心して清澄山を去り、鎌倉に一先づ落着いた。此より三十二歳の春までは全く研究に費された。其間に清澄山に立歸つたことも一度はあるが、其の大部分は旅に過された。鎌倉には淨土門の學者が多く居たが、大阿はその中でも出色の人であつた。上人は此人に就て其の教義を究めた。その外禪宗律宗等の碩學にも一々其の説を問うた。仁治三年、二十一歳にして叡山に上り、此より十年あまりの間は重に此地が研學の場所であつた。今でも横河の定光院は上人の遺蹟として残つて居る。東塔の圓頓房も上人の住せる所と傳へられて居るが、その址は亡びてしまつた。叡山は天台宗の根本道場であるが、獨り天

台の教義のみならず、諸宗の教義が盡く兼學された。又佛教のみならず、平安朝の初期以來支那から傳はつた學藝は殆んど皆此處で攻究せられ保存せられたので、此處は新文明の淵源とも稱せらるべき所であつた。佛教界に於て目覺しい活動をした人の大部分は皆此の叡山から出た。初めて京都の街に立つて念佛をすゝめた空也上人も此處から出た。往生要集を作つた慧心僧都も此處に居た。淨土宗を開いた法然上人も、淨土眞宗を開いた親鸞上人も此處から出た。臨濟の禪を宋より傳へた榮西も、曹洞の禪を傳へた道元も皆此處から出た。日蓮上人の研究時代も多くは此處で費された。

但し叡山を本據とはして居たが、上人は遍く京畿地方を遊歴して、苟くも碩學の聞えのある人には一々之に就て教へを乞うた。臨濟宗の圓爾、曹洞宗の道元などが宋から歸つて京都に居たのをも尋ねた。宋僧の道隆にも逢つて其の説

を叩いた。南都の諸寺をも尋ね、紀州の高野山にも上り、三井寺にも學んだ。京の泉涌寺、攝の天王寺にも遊んで多くの經論を讀んだ。なほ又當時の一流と許されたる學者に就て國學や儒教をも究めた。學を好むことは上人の天性である。上人は如何に忙しい間でも研究を廢したことはない。後年に至り佐渡に配流せられた際に、其の弟子に遺はした消息の中にも、

外典書の貞觀政要、すべて外典の物語八宗の相傳等、此等がなくしては消息も書かれ候はぬに、かまへて〜給ひ候べし。——佐渡御書

とある程である。今日に傳はつたる日蓮上人遺文集を讀んで見ると、其の引證の該博なること實に驚嘆に堪へぬばかりである。諸宗の開祖等は到底比較にならぬ。此を以ても上人が壯年時代に如何に研究に銳意であつたかを推すべきである。

此の如き熱心を以て學び盡し究め盡したる末に得たる所の結論は「釋尊の眞實の教は法華經の中に説き顯はされて居る。諸經の王として尊むべきは法華經である」といふことであつた。

要を以て之を言は、如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力、如來の一切の祕要の藏、如來の一切の甚深の事、皆此經に於て宣示顯説す。是故は汝等如來の滅後に於て、應に一心に受持讀誦解説書寫して、説の如くに修行すべし。——法華經神力品

といふは後世の者の言ではなく、釋尊御自身に仰せられた所であるから、後世の者は仰いで之を信じなければならぬのである。此經を信する者は即ち佛の御心を以て自身の心とする者である。世間が如何に險惡になつても、此の如き人が多くなれば必ずや永い平和が得らるべきに極つて居る。

日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、此人世間に行じて能く衆生の闇を滅せん。——神力品

といふは疑ふべからざる所である。

殊に貴く感ぜらるゝのは此の法華經が末世の吾々の爲に説き遺されたといふことである。釋尊は此經を普く世に弘むべきことを勧められて、

誰か能く此の娑婆國土に於て廣く妙法華經を説かん。——寶塔品

と仰せられ、なほ重ねて

能く來世に於て此經を讀み持たんは是れ眞の佛子、淳善の地に住するなり。

佛滅度の後に能く其義を解せん、是れ諸の天人世間の眼なり。——寶塔品

と告げられたが、更にその『來世』とは何れの時であるかを明されて、

我が滅度の後、後の五百歳の中に廣宣流布して、閻浮提に於て斷絶せしむる

こと無かれ。——藥王品

とある。後の五百歳といふは佛の入滅より二千年を経て後の（此事は後に詳説する。）五百年間のことである。所謂末法の世のことである。即ち釋尊は末法の世に至つて此の法華經を普く世に弘め、その力によつて一切衆生を救ふべきことを命じて置かれたのである。大集經の中には末法の世のことを『白法隱没』の時といつてある。白とは正の意、黒とは邪の義である。白法とは即ち正法である。人心が非常に險惡になつて、唯だ私利私欲を旨として相争ひ、あらゆる正法は世に行はれぬやうになるのである。けれども決して絶望するには及ばぬ。彼の大集經の白法隱没の時は第五の五百歳、當世なる事は疑ひなし。但し彼の白法隱没の次には法華經の肝心たる南無妙法蓮華經の大白法の……廣宣流布せさせ給ふべきなり。——撰時鈔

といふことは佛の豫め定め置かれたる所である。

此の一事を信するならば、たとへ末法の世に生れて果敢ない事の數々を眼前に見たとて、少しも驚くべきではない。其の混亂の極に達したる中から、新なる光明が見出さるゝのである。一切衆生の煩惱に役せらるゝさまは宛も病者の如く、之に對して與へらるゝ教は宛も藥の如きものである。藥はその病に適して初めて效驗を現はすべきである。軽い病を癒す藥はいろ／＼有らうが最も重い病になれば、たゞ名醫の處方による靈藥の力によつてのみ之を治し得るのである。末法の世に及んで、人々の心の病が最も重なつて來た時には、尋常一様の教を以て之を救ふことは出來ぬ。是れ釋尊の大慈悲心を以て、特に此の法華經を末法の世の衆生のために説き遺されたる所以である。それ故にこそ是の好き良藥を今留めて此に在く、汝取つて服すべし。差ゑすと憂ふること

勿れ。——法華經壽量品

と懇に告げ置かれたのである。

古より此の法華經を自ら信じ人にも勧めた人々は、いづれも其の末法の世に於て廣宣流布すべきことを疑はなかつたのである。天台大師は一切の經論を讀破し、法華經の最勝なることを信じ、之を弘めんが爲に其の生涯を捧げた人であるが、此經の普く世に弘まるべき時機を説いて、

但だ當時大利益を得るのみにあらず、後の五百歲遠く妙道に沾はん。——法華

文句

といつた。當時とは釋尊御在世の時のこと、後の五百歲とは末法の世のことである。唐の妙樂大師は天台の教を祖述するに大なる功のあつた人であるが、同じく此意を承けて

末法の初め冥利なきにあらず。——法華文句記

といつて居る。又日本國に於て初めて天台宗を弘めたる傳教大師は、

正像稍や過ぎ已つて末法甚だ近きに有り。法華一乘の機、今正しく是れ其時

なり。——守護國界章

といつて居る。佛滅後一千年間を正法の世といひ、その次の一千年間を像法の世といふ。傳教大師は像法の世の末の頃に出た人である故に、正像やうやく過ぎて末法の世も近きにあるといつたのである。斯く和漢の碩徳が何れも此の法華經が末法の世に至つて普く天下に流布すべきことを信じ、その基礎となるべきために自分達が努力するのであるとの意を明して居るのは、大に心を留むべきことである。

日蓮上人は其の研究の結果が空しからずして、積年の疑惑を盡く掃ひ得た

ることを深く悦ぶと共に、『此の法華經の廣宣流布すべき時は今である』と知つて、何にも比べられぬ満足を感じたのである。生ある者も多くある中で人の身を受くることは難い。人の身を受けても佛の教にあふことは更に難い。佛の教を知つても其の眞意を得ることはまた更に難い。況して其の眞實の教の廣宣流布すべき時に生れ合ふことは難中の難といはなければならぬ。

時代を以て果報を論ずれば、龍樹天親にも超過し、天台傳教にも勝れるなり。——顯佛未來記

といふ歡喜の情の湧いたのも不思議ではない。但し如何に其時が到來して居ても、此經を弘むべき人が出なければ弘まらう筈はない。此經が弘まらぬ間は佛の御本意が世に顯はれぬのであるから、世が安穩でないのも已むを得ぬことである。世のため人のために最も待たるゝは此經を弘むる人の出現である。

當に知るべし是の人は則ち如來の使なり。如來の所遣として如來の事を行するなり。——法師品

といひ、また

當に知るべし是の人は佛の莊嚴を以て自ら莊嚴するなり。則ち如來の肩に荷擔せらるゝことを爲ん。——法師品

とまでいつて有るのは、即ち此經を弘むる人のことである。此の如き人は何處から出るであらうか。

本來ならば此の如き人が叡山から出る筈である。古に遡つていへば吾國に於て初めて法華經の重んずべきことを明かにせられたのは聖德太子である。太子は自ら朝廷の百官のために維摩經と勝鬘經と及び法華經とを講じたまひ、又此等の三經の義疏を作つて後世に遺された。就中法華經に就ては特に力を盡

されたもので、日本書紀の推古天皇十四年の下に、

是歲皇太子亦た法華經を岡本の宮に講ず。天皇大に之を喜び、播磨の國の水田百町を皇太子に施し、因て以て斑鳩寺に納る。

と記してある。此より以後法華經は一般の人の重んずる所とはなつたが、此經を中心として一代聖教の精神を解釋すべきことは傳教大師によつて初めて明にせられたのである。傳教といふは清和天皇の貞觀八年に證せられたので、最澄といふが其名である。十二歳にして南都大安寺の行表を師として出家し、六宗の教義を究めたが何れにも満足することが出来ず、なほ深く究めやうといふ志を起し延暦四年、十九歳にして叡山に上り、草庵を結んで法華、金光明、般若等の諸大乘經を讀んだ。此時の誓願文の中に、

伏して願はくば解脱の味獨り飲まず、安樂の果獨り證せず、法界の衆生と同

しく妙覺に登り、法界の衆生と同しく妙味を服せん。……佛國土を淨めて衆生を成就し、未來際を盡すまで恒に佛事を作さんことを。

とあるによつて其の志の存する所を推すべきである。斯くて研究を重ねて居るうちに天台大師の著を得て、之を寫すことが出来た。

此等の典籍はもと唐僧鑒眞の持ち來つたものである。此人は學徳共に高い人であつたが、特に戒律に精しかつた。吾國より入唐した榮睿と普照といふ二人の請によつて吾國に來朝することを思ひ立ち、六回の大難を冒して孝謙天皇の御宇に來着した。朝廷の御信用も非常にあつく、歸依の人も殊に多くて十年の間弘教に努めて、七十七歳で没した。此人の來朝の時に天台の典籍を持つて來たのであるが、主として戒律の方ばかり弘めて、天台の教義は全く弘むる暇がなくて終つたのを、傳教大師が初めて研究したのである。其の書といふは圓

頓止觀。(摩訶止觀といふのも同じものである)法華玄義。法華文句。天台四教義。維摩經疏等であつた。大師は此等の諸書を精讀すると共に、前に讀誦したる諸經の深意が盡く明かになり、積年の疑問が盡く氷解したる感を爲し、自ら奮つて此の天台の教義を本邦に弘めやうといふ覺悟を定めた。乃ち延暦七年叡山に一寺を創め、之を一乘止觀院と名けた。これ實に本邦に於ける最初の法華の道場である。大師は時に二十二歳であつた。

阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我が立つ所に冥加あらせたまへとは此時の詠である。法華經によれば諸佛は皆一大事の因縁によつて世に出現したまへるものである。一大事とは一切衆生をして盡く皆佛と成ることを得せしむることである。法華經を弘むるは即ち諸佛の世に出たまへる目的を果すものである故に、諸佛は必ず加護せらるゝであらう。諸佛の冥加によりて法華

經の必ず日本國に弘まるべきことを信じて、大師は其の最初の道場を創めたのである。之を延暦寺と稱するのは嵯峨天皇の勅命に依るものである。大師は弘仁十三年に寂し、その翌年に至つて延暦寺の名を賜へるものである。

大師が桓武天皇の篤き御信用を得たことは、法華經弘通のために大なる力であつたと思はれる。天皇は英邁なる御性質で、夙くより國運の發展を圖るには大和の如き山間に都があつては甚だ不利であるといふ點に着眼せられ、延暦三年に長岡へ遷都せられたのであるが、此地もまた國都として不適當であつたので、延暦六年更に遷都の詔を發せられた。それで平安の新京が出来て再度の遷都を實行されたのは延暦十三年である。叡山は此の新都に近く、傳教大師が天皇の御諮問に答へる機會も多かつたので、天皇の御信用は次第に加はつた。固より天台宗は法華經を依經とするものであるが、天台大師は法華經以外の經に

も註釋を加へた。その中に仁王經と金光明經とがある。此の二經は何れも佛法の精神を本として國を治むべきことを説かれたものである。傳教大師は此の二經を法華經と併せて鎮護國家の三部經といひ、特に之を重んじた。即ち佛法と王法とが相冥合して、國土も安穩になり人民も各その所を得るやうになることを理想としたものである。

さて傳教大師の努力によつて天台宗が次第に國內に弘まつては來たが、南都の諸宗は久しく朝家の御保護の下に榮えて來たものであるから、新に興つた天台宗を自分達と同等に視ることを如何しても納得しなかつた。それ故に傳教大師は其等諸宗の人々をして法華の最勝なることを承認せしめなければならぬと心を決し、桓武天皇の勅許を得て其等の人々と對論することになつた。因つて延暦二十一年正月、高雄寺に於て南都諸寺の碩學十餘人を會し、大師は共に法華

の妙旨を講演して、終に人々を承服せしめた。此時に人々から桓武天皇に上つた表の中に、

七箇の大寺、六宗の學生、昔より未だ聞かざる所、曾て未だ見ざる所。三論法相久年の諍ひ換焉として氷釋し照然として既に明なり。猶ほ雲霧を披いて三光を見るが如し。……一妙の義理始めて乃ち興顯し、六宗の學衆初めて至極を悟る。謂ふべし此界の含靈今より而後悉く妙圓の船に載せられ、早く彼岸に濟ることを得んと。

といふ如く讚歎の語を悉して居る。此によつて天台宗の基礎は牢乎として抜くべからざるものとなつた。

斯く天台宗の基礎が固くなつたに就て、傳教大師はなほ自ら安んぜざる所があつた。自分は天台大師の遺されたる教を種々の典籍に就て究め、其の本意を

得た積りではあるけれども、萬一にも未だ究め盡さぬ所があるならば、その不完全なものを普く海内に弘めては相濟まぬことである。因つて是非とも唐に渡り天台宗の碩學に親しく教を受け、自分の解し得たる所に誤りの無きか否かを明かにしたい。大師は其の最得意の時に於て、此の如くに自ら恐れ且危ふむの念を起したのである。是は實に貴いことである。

賢人は八風と申して八つの風に侵されぬを賢人と申すなり。利衰毀譽稱譏苦樂なり。大旨は利あるに由るこばず、衰ふるに歎かず等の事なり。此八風に侵されぬ人を必ず天は守らせ給ふなり。——四條金吾御返事

と日蓮上人のいつたのは、其儘に傳教大師の身に適切である。斯くて大師は延暦二十三年七月、遣唐使の船に乗つて入唐した。時に三十八歳である。

其頃の船は極めて不完全なもので、航海の危険は一通りでなかつたやうであ

る。前にいつた唐の鑒真和尚の如きは五回までも船に故障があつて、六回目にやうやく來朝したが、海上の瘴氣のために全く盲目になつて居たこのことである。又此時に傳教大師の乗つた船も實は前年に浪華を發したのであるが、暴風に遇つて明經博士豊村家達等が溺死したので、一年後に又改めて船出したのである。此外にも航海の困難であつたことに就て種々の傳説がある。されば當時に於ての入唐は命懸けの事であつたのである。大師が既に海内第一の名僧として崇敬せられて居ながら、なほ道を求むるが爲に此の危難を冒したといふは驚歎すべき事といはなければならぬ。大師は九月の上旬に彼地に着き、翌年の五月中旬まで滞在して、彼地の天台宗の碩學として聞えたる、道邃及び行滿等の諸師の説を叩き、愈其の信する所の誤りなきことを確かめて歸朝した。

歸朝してから十八年の間、大師は法華經を弘むることに全力を傾けたのであ

るが、其の積年の希望たる叡山に戒壇を設くる一事は、その生前に勅許が無かつた。戒壇は受戒を正式に行ふ場所である。受戒とは即ち自ら佛門に歸して永く佛戒を持たんことを誓ふの式である。(猶ほ戒壇に就ては別に詳説する。)從來吾國には三戒壇があつた。彼の唐僧鑒真の來朝により孝謙天皇の天平勝寶六年に、南都東大寺に築かれたのが最初の戒壇で、其後下野の薬師寺と築前の觀世音寺に戒壇を作られて凡て三ヶ所となつた。此等の戒壇の作法は何れも小乘經に依るものであるが、戒に大小の別なしとの意で大乘諸宗の僧も此等の戒壇に於て受戒せしめたのである。然るに傳教大師の信する所によれば諸經は法華經によつて統一せらるべきものであるから、戒壇の作法もまた法華經の旨によつて立てられたものでなければならぬ。即ち圓頓の戒壇でなければならぬ。圓とは圓融の義である。法華經は諸法を圓融するものである。頓とは頓速の義であ

る。法華經の力によつて頓速に成佛を得らるべきものである。されば天台大師の立てたる教を圓頓教といふ。戒壇もまた此の教の旨に基いて立てなければならぬので、將來の理想をいへば苟くも大乘の教に歸依する者は皆此の戒壇に於て受戒するに至るべきである。

但し従前の三戒壇は何れも勅命によつて建てられたのであるから、勅許なくして叡山に新なる戒壇を作ることには出来ぬ。その勅許の下らぬ前に傳教大師は弘仁十三年六月、五十六歳を以て遷化した。其後を承けたものは弟子の義真である。此人は師の入唐の際にも之に従ひ、台州の國清寺に於て圓頓戒を受けて歸つた程の人で、上下の歸依も頗る厚かつた。されば淳和天皇の天長元年に天台宗の座主を置かるゝことになつて、義真は其の第一代に推され、同四年に至つては傳教大師の宿願たる戒壇を叡山に置くことを勅許になつた。尤も傳教大

師の初七日に菩薩大戒を授くべき旨の官符を義真に賜はつたのは、大師の宿願の果さるべき内意に當るのであるが、其より五年の後に至り公に之を許されたのである。叡山の記録によれば此の戒壇院は檜葺方五間で金色の釋迦牟尼佛坐像一體と綠色の文殊彌勒の像各一體とを安置した。而して

右院依_レ太政官去天長四年五月二日下_二近江國_一符旨_上所_二創建立_一也。——叡岳要記とある。叡山が本邦に於ける法華經の根本道場たるべきことは愈々確定したわけである。

此より相傳へ相承けて、日蓮上人の時までに座主は七十三代にも及んで居る天台大師や傳教大師が末法の世のためにと努力せられたる志を果す者は、是非とも叡山よりして出なければならぬ筈である。然るに叡山には既に久しく天台傳教の精神が失はれて、謗法の地となつてしまつた。天台傳教の努力の貴い

ことを知ると共に、其の流を汲む人々のいふにかひ無い有様になつたのを見て天台宗の人々は我宗は正なれども邪なる他宗と同すれば、我宗の正をも知らぬ者なるべし。譬へば東に迷ふ者は對當の西に迷ひ、東西に迷ふ故に十方に迷ふなるべし。……天台宗の人々は我宗は實義とも知らざる故に我宗の亡び我身の軽くなるをば知らずして、他宗を助けて我宗を失ふなるべし。——法門可被申様之事

といふ感じを強うするに至つては、如何しても自ら奮起しなければならぬのである。

斯る時刻に日蓮佛勅を蒙りて此土に生れけるこそ時の不詳なれ。一如説修行鈔といふ一語は、即ち法華經の行者として奮起したる上人の心事を明かに語れるものである。

三、日本國の諸宗

最勝の經たる法華經は印度より支那を経て吾が日本に傳はつた。其の漢譯も數本ある中で、最も優れたる譯本は今日吾々が讀誦する所の妙法蓮華經で、これは龜茲國の人なる鳩摩羅什が支那へ渡つて、秦主姚興の保護の下に譯出したるものである。羅什は若年の頃に印度に入つて佛敎を研究し、多くの經を携へ歸つたのであるが、其の師たる須梨耶蘇摩は法華經の原本を羅什に與へた時に佛日西に入り遺耀將に東北に及ばんとす。茲の典は東北に縁あり、汝慎んで傳弘せよ。

といったといふ事が傳はつて居る。此の言は虚しからずして、支那より日本と東北の方に向つて傳はつて來た。されば傳敎大師は

代を語れば則ち像の終にして末の始め、地を尋ねれば則ち唐の東にして羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生鬪争の時なり。——法華秀句
 とて、此經が末法の始めに當つて吾が日本國に弘まり、然る後に他國にも及ぶべきことを豫期して居つたのである。

若し叡山に傳教大師の此の精神が傳はつて居たならば、末法の世が近づくに隨つて生命にかけても法華經を弘めやうといふ決心の人が多く此處から出づべき筈である。然るに大師より後の叡山は次第に密教に近づいて行つた。密教を日本に傳へたのは弘法大師である。此人は傳教大師と共に唐に渡り、傳教よりは一年後れて大同元年に歸朝し、眞言宗を立てたのであるが、日蓮上人の評

漢士に渡りては金剛智、善無畏の兩三藏の第三の御弟子慧果和尚といひし人

に兩界を傳授し、……平城天皇に見參し御用ありて、御歸依他に異りしかども、平城程もなく嵯峨に世をどられさせ給ひしかば、弘法引入れてありし程に、傳教大師は嵯峨の天皇弘仁十三年六月四日御入滅。同じき弘仁十四年より弘法大師王の御師となり眞言宗を立て、東寺を給ひ眞言和尚と號し、此より八宗始まる。——報恩鈔

とある如く、傳教大師の存生中はあまり勢力も得られなかつたのであるが、傳教亡き後には其の學問といひ識見といひ肩を比ぶべき者もなかつたので、隆々たる勢力となり京都の東寺を本據として盛に眞言宗を弘めた。

叡山は義眞の後に第二代の座主は圓澄、次は圓仁と續いたのであるが、圓澄の時から既に眞言宗に傾き、圓仁は入唐して天台眞言二宗の教義を究めて歸り眞言宗の人々の主張たる『理同事勝』といふことを信じて、眞言の三部經を以て

法華經に勝れりとするに至つた。眞言の三部經といふは大日經と金剛頂經と蘇悉地經とである。此等の諸經によつて眞言宗は立てられたのであるが、此等諸經に説かるゝ所の理と、法華經に説かるゝ所の理とは相同じといふが即ち「理同」である。しかし法華經に説かるゝ所が如何に高遠であつても、それを實行すべき方法が明かに示されてない。眞言宗の方では印を結び眞言を唱ふることによつて佛の力が吾等の心に通ひ、吾等凡夫でも菩提を成じ得べきことが教へられてある。此等の實行方法が法華よりも勝つて居るといふので「事勝」と稱するるのである。圓仁は歸朝後自ら金剛頂經と蘇悉地經の疏を作り、其の誤り無きや否やを知らんとて、之を本尊の前に置いて祈請を凝らしたが、五日目の夜半に夢想を得た。それは青天に日輪の懸つて居るのを、箭を以て射たところが、箭は日輪の眞中に立つたと見たのである。之によつて自ら佛意を得たりと信じ

此より叡山に在つて密教を弘めた。圓仁は朝野の歸依あつく、後に慈覺大師と論せられた。

圓仁の次の座主は安慧、その次は圓珍である。此の圓珍は後に智證大師と論せられた人で、慈覺と同じく入唐して天台眞言の教義を學び、歸朝して後も慈覺と同じく密教を弘むることに力を用ゐた。此よりして東密台密といふ語も出来た。眞言宗は東寺を本據として弘められたものであるから之を東密といふ。之と相對して天台宗の密教を台密といふのである。但し東密と台密と全く同一ではない。例へば東密に於ては大日如來を釋迦如來より以上に立つるのであるが、台密に於ては二尊を同體なりとするのである。其他にも彼此と異同の點はある。しかし法華經が最勝の經であるといふ天台大師の斷案を斥けてしまへば、天台宗といふものは立たぬことになるので、たとへ眞言宗と全く同一でな

くても、

日本の弘法慈覺等三藏の諸師は四依の居士にあらざる暗師なり。——曾谷入道

殿御書

と一括しての批評を免れぬものである。また

師子の中の蟲師子を食ふ。佛教をば外道は破り難し、内道の内に事出で來り

て佛道を失ふべし、佛の遺言なり。佛道の内には小乗をもて大乘を失ひ、權

大乘をもて實大乘を失ふべし。此等は又外道の如し。又小乗權大乘よりは實

大乘法華經の人々が、かへりて法華經をば失はんが大事にて候べし。——法門

可被申様之事

といふ日蓮上人の批評も頗る適切である。

外より壞さるゝよりも内より崩るゝことを戒めなければならぬとは、釋尊の

屢々諸弟子に教へられた所である。其の阿難に對して説かれた所に、

譬へば師子の命終して身死するに、若しは空若しは地若しは水若しは陸の所

有の衆生、彼の師子の身肉を噉食せず。唯だ師子の身に自ら諸蟲を生じ、還

つて自ら師子の肉を噉食するが如し。阿難、我が佛法は餘の能く壞るべきに

非ず。是れ我が法の中の諸惡比丘猶ほ毒刺の如く、我が三阿僧祇劫に積行勤

苦して集る所の佛法を破らん。——蓮華面經

とあるのは世によく知られたる譬喩である。實に名利の念に動かされて、教の立てられたる根本の精神を忘れたものが、いつも内よりして其教を壞るのである。其の外形のみを以ていへば、智證大師以後に至り天台宗は益々隆盛になつたのであるが、傳教大師の精神に背いて如何に繁昌しても更に慶すべき事ではない。

智證大師は天安二年に唐より歸朝し、翌貞觀元年に三井寺を再興した。寺は近江國大津に在り、もと天智天皇の勅により崇福寺をこゝに移したのが初めて。後に天武天皇の時改めて一寺を創し園城寺と名けたのである。其後荒廢して久しきを経たのを智證が勅許を得て再興したので、此より後は天台宗の寺となつた。智證は幾くもなく叡山に入つて第五代の座主となつたが、三井寺は天台の別院とせられた。されば三井寺は叡山の下に屬すべきものであるが、後には獨立の形となり、彼を山門といひ此を寺門といひ、兩々相對して教勢を張ることになつた。斯く對立すると共に自然と勢力を争ふやうになり、三井寺では勅許を請うて其の主長を長吏と呼び、叡山の座主と拮抗することにしたが、それでも未だ満足せず、後朱雀天皇の長曆三年には叡山と對抗して三井寺にも戒壇を置くことを奏請した。此より山門と寺門との紛争は長く續いて、互に暴力に訴

へてまで争ひあふやうになつた。殊に叡山の僧徒の如きは、朝廷の御計らひに不平なりとて京都に亂入し暴行を働いたことも度々あつた。彼の白河院が加茂河の水と雙六の賽と山法師との三つを數へて、思ふ通りにならぬ者と嘆せられたといふ話さへ残つて居る。傳教大師が山を開いてから三百年の後には斯くも淺ましい有様になつてしまつた。

元來平安朝に於て諸寺の繁昌したといふことが佛教の根本精神からいへば決して慶賀すべきでは無いのである。形の上でいかに繁昌しても其の精神を失へば滅亡したと同様のものである。日蓮上人は諸宗の寺の薨を連ね軒を並べた鎌倉に在つて、

弟子一佛の子と生れ諸經の王に仕ふ。何ぞ佛法の衰微を見て心情の哀惜を起さざらんや。——立正安國論

と嘆じたが、盛衰は正法の弘まると否とに在る、決して堂塔の多少によつてトすべきものではない。聖徳太子が「篤く三寶を敬へ」と教へられたる理由は、

人尤だ悪きは鮮し、能く教ゆれば之に従ふ。其れ三寶に歸せずんば何を以てか枉がれるを直うせん。——憲法第二條

とある。即ち佛法の力によつて人心の枉がれるを直くし、相和し相睦みて各其事に勤めさせやうといふ御趣意である。これは如何にも貴い御志である、若し人の心を正しくすることが出来なければ佛法の興隆に努力するかひは無いわけである。釋尊は一切衆生を救護せんが爲に世に出て教を説かれたのであると明されて、

諸苦の所因は貪欲これ本なり。若し貪欲を滅すれば依止する所無し。——法華

經論品

と戒められたが、實際此の通りである。若し自ら其心を直くすることを忘れて佛の利益を求むる者があれば、僧侶たる者は之を論して其の非を悟らしめなければならぬ。若し彼が卑しい貪欲の念に囚はれて居るのを呵責もせず、却て其意を迎へて自己の寺の繁昌を謀るものがあれば、是れ佛法を破壊する者で、前にいへる如く獅子身中の蟲とは此徒のことである。

然るに平安朝に於ける諸寺の僧徒の有様を見るに、多くは貴紳の間に出入して、其の依頼に應じて所謂「御修法」を勤め、それで其寺の繁昌を謀つて居たのである。一家一族の繁榮を祈るとか、子孫の繁昌と祈るとか、病氣の平癒を祈るか、御産の平穩を祈るとか、何れも眼前の事に關して祈りをかくる爲に或は寺に詣で或は僧を請じたものである。殊に藤原氏が幾つにも分れて互に勢力を争ふやうになつてからは、其の競争に負けまいといふ希望から信心をした

もので甚しいのになると自分の競争の相手が失脚するやうにといつて祈禱を頼む者すら少くはなかつた。皆是れ名利の奴である。それを教へ諭して、貪欲が苦の本であることを悟らしめんとする僧としては殆んど無く、却つて彼等の欲望を煽動して祈禱の頼みを引受けやうと競争する徒のみが多かつた。此の如き僧徒が互に歸依者を得やうとして騒ぐ有様は、まことに見苦しい事であつた。釋尊は末世の僧等の淺ましい有様を豫想せられて、

我が涅槃の後無量百歳にして四道の聖人悉く復た涅槃せん。正法滅して後像法の中に於て當に比丘あるべし。持律に似像して少しく經を讀誦し、飲食を貪嗜して其身を長養し、袈裟を著すと雖き猶ほ獵師の細めに視て徐に行くが如く、猫の鼠を伺ふが如く、常に是の言を唱へん、我羅漢を得たりと。外には賢善を現し内には貪嫉を懷かん。——涅槃經

と仰せられたが、實に此の通りこのことが實現されたのである。

勢力争ひに伴つて、互に詭計を構へて排擠しあふことも次第に烈しくなつたが、殊に後宮に於ける婦人同士の間にはそれが甚しかつた。又其の婦人を操る其の親や兄の烈しい暗闘も勿論絶えず行はれた。薄暗い室の中に閉ぢ籠つて居て、外へ出ることは碌になく、いつも嫉みあひ妬みあつて陰謀を凝らして居るのであるから、大概な者は陰鬱な氣分になつてしまふ筈である。其頃の日記や物語を今讀んで見ると、一にも戀二にも戀といつて、歌を詠んだり文の取りかはせをして騒いで居るのが、あまり馬鹿らしいやうに見えるが若しあれで戀の歌でも詠まなかつたなら、とても生きて居る氣力は無かつたであらう。斯様に陰鬱な生活をして居る人々の間に、恐なる恐怖心の發達したのは想像に餘りあることである。日記や物語には『物の怪』とか『靈』とかいふことが間斷なく出

て来る。それを攘ふために祈禱を頼まれて、僧徒は常に後宮に出入したのである。其の心の本を正しくすることを教へないで、祈禱をしたとて何の用に立つものではない。

我が心自ら空なれば、罪福主なし。——普賢經

といふ語を知らぬ僧ばかりでも無かつたであらうが、あまりに愚なる事のみが續いたものである。

斯様な状態であるから、密教が獨り勢力を得るやうになつた筈である。密教の教義が他に優れて居るから勢力を得たといふわけでは無く、其の修法の形式が最も整頓して神々しかつたのが此の時代の要求に投じたのである。大日經の中には佛智を説いて、

菩提心を因と爲し、大悲を根本と爲し、方便を究竟と爲す。

とあり、又更に

云何か菩提とならば、謂く實の如く自心を知る。

とあつて、貪心無貪心等の種々の心相を擧げてあるが、此の如く自己の心に反省して過失を防ぐといふやうな事は全く考へられなかつた。信心を勵むものも唯だ自己の欲望を充さんが爲である。信心を勸むる者も他の欲望を充したる報酬として堂塔を建てさせて、其の寺の繁昌を誇るといふ有様であつた。源平盛衰記に記す所によると、三井寺の頼豪阿闍梨は白河天皇の中宮賢子の爲に皇子御誕生の祈禱を勵み、その效驗ある上は恩賞は望みに任すとのことであつた。其の祈禱の效のあつたものか幾くも無く皇子御誕生になつたので、頼豪はその恩賞として三井寺に戒壇建立の勅許を得たいと願つた。けれども此事のみは如何しても勅許が無かつたので頼豪は憤然として「頼豪思ひ死に死失せなば、皇

子は我が參らせたるものなれば即ち取返し奉るべし』と言ひ放つて三井寺に歸り、其後皇子も薨去になり賴豪も憤死したが、其の怨靈は鼠となつて多くの眷族と共に叡山に現はれ、多くの經卷を噛み破つたといふことである。これは固より信するに足らぬ小説であるけれども、此の如き愚なる傳説を生み出したのを以ても、その時代の墮落したる信仰の狀態を推想し得べきである。

又此の時代の人の信仰を墮落せしめた一の原因は、遊戯的の氣分の混じて來たことである。藤原氏一門の榮華の生活が久しく續く間に、勤勉努力の氣風は殆んど地を掃つて無くなつた。殊に遣唐使も止められ、支那や朝鮮との交通も無くなつてからは、外より刺戟さるゝといふ事は全く無く、一體の空氣が愈々沈滞して來た。斯る單調なる生活の中に於て、寺に詣づるとか經を讀むとか、法華八講を催すとか維摩會を營むとかいふことは、其の單調を破るのに頗る適

したものであつた。現今でも生活に餘裕のある人達が書畫骨董を翫ぶと同じ氣分で坐禪をしたり提唱を聽いたりするのが少くない。平安朝のむかしも此と同じやうな人達が少くなかつたので、諸寺の僧侶の中には巧みに斯様な人々の相手をして、その寺の繁昌を圖つたのも随分ある。僧侶の中に比較的歌人の多かつたのも、此の事實と大なる關係がある。又彼の藤原道長が出家して法成寺に居つたのを始めとして、地位の高い人で出家したのが多くある。けれども其等の人達は出家して清淨なる生活に入り、煩はしい世間を離れたのでは無く、出家せぬ前と全く同様に煩惱に充ちた心を以て、全く同様な華麗な生活を續けて居たのである。つまり出家といふことは一種の遊戯に過ぎぬのである。道を求むるといふことは人生に於て最も眞面目なることである。それを遊戯的に取扱ふといふは、佛を侮り教を侮ると共に、又自ら侮るの甚しきものといはなけ

ればならぬ。

貴い聖教を弘むる人は自ら輕んじ自ら侮つてはならぬ筈である。遊戯的の氣分で信心をする人の意を迎へて自己の榮達を圖るやうな考へで『如來の使』たる法師の名を冒すのは耻を知らぬ者といはなければならぬ。法華經の中には、此經を弘むる用意を説いて、

若し利根にして智慧明了に、多聞強識にして佛道を求むる者有らん、是の如きの人には乃ち爲に説くべし。若し人曾て億百千の佛を見て諸の善本を植ゑ深心堅固ならん、是の如きの人には乃ち爲に説くべし。若し人精進して常に慈心を修し身命を惜まざらんには、乃ち爲に説くべし。——譬諭品

といふを始めとして種々の場合を擧げてあるが要するに眞面目に道を求むる者に對して、眞面目に教へ導いてやれとの趣意である。大切なる信仰の問題を遊

戯的に取扱ふことの許されやう筈が無い。此の嚴正なる態度を缺くならば、如何に多くの經論を暗んじ、如何に巧みに法を説き道を論ずることも、法師の名を冒すことは出来ぬものである。斯く濁り果てた天台宗の末流から、身命を惜まらずして法華經を弘むる者が出ることを望むのは所謂木によつて魚を求むるの類である。

但し叡山の僧徒が一人もなく名利を追ふやうになつたわけでは無い。其中で念佛を勧むるために力を用ゐた人々の如きは確かに眞面目であつた。又其の念佛を勧めたことは確かに時代の要求に應ずるものであつた。彼の藤原氏が華やかなる京都の生活に耽つて、殆んど全く國事を顧みなかつた間に、一般人民は甚しい困苦を嘗めて居たのである。地方の政治は全く國司等に任せたままで中央から殆んど監督を加へなかつた爲に、百姓を收斂して私腹を肥す地方官の

みが多くなり、人民が天災地變等の爲に悩んでも熱心に其の救恤を謀る者などは全く無い有様であつた。又紀綱の弛んだのに乗じて山賊や海賊が横行してもそれを取締ることも殆んど出来なかつた。斯る時代に生れた農民や商人などは絶望的になるより外はなかつた筈である。此等の憐むべき者に慰安を與ふことが佛弟子の務めであるのに、僧徒の多くは貴紳の歸依を求むることにのみ汲々として其他の者を顧みなかつた。斯る頼りの無い生活を久しく續けて居る間に、『何か頼りになるものがほしい』といふ熱烈なる要求が次第に一般人民の間に燃立て來たのは當然の事である。

又一方に榮華を極めた宮廷の生活にも、その裏面には常に暗流が漲つて居た。互ひに勢力を争つて勝つ者と負ける者とが出来来る。その勝つた方は得意であるが、負けた方は悲惨である。又負けた方が其儘では濟まさず、勢力を盛り返す

ことを巧むのであるから、勝つた方でも決して油断はならず、いつも不安の念に襲はれて居なければならぬのである。殊に親や兄の名譽心の犠牲になつて斯ういふ競争の渦巻の中へ投込まれた婦人などは、實に氣の毒千萬なものである。競争に勝つても、始終呪ひの眼を以て見られて居るのは愉快なものではない。まして失脚して後の有様はまことに痛々しいものである。赤染衛門の書いた『榮華物語』は藤原氏一門の榮華の跡を記し止めたものだといふが、少しばかり読んで見ても、斯ういふ氣の毒な犠牲になつた人達の事ばかりが多くて、暗い氣分になつてしまふ。

もえ出るも枯るゝも同じ野邊の草いづれか秋にあはではつべき
とは獨り清盛の寵を失つた祇王の述懐のみならず、少しく考へのある婦人は皆同様に感じたことであらう。斯ういふ氣分の人々は祈禱を主とする佛教で満足

の出来やうわけは無く、モット深い意義のあるものがほしいといふ要求が自然に高まつて来た筈である。

此の如く朝野共に新しい教を求むる機運が次第に動いて来たところへ、漸く弘まつて行つたのが念佛の教である。即ち阿彌陀佛を念じて極樂淨土に往生せんことを求めよといふ教である。此の教の根據となるものは無量壽經、觀無量壽經及び阿彌陀經で、所謂淨土の三部經なるものである。支那では晋の代に廬山の慧遠法師が白蓮社を結んで念佛を勧めた等のこともあるが、後魏に曇鸞出て往生論註等を作り、唐に至つて道綽と善導との二人が出て聖道門を措いて淨土門に歸すべきことを勧むるに及んで、非常なる勢力となつた。吾が奈良朝から平安朝の初期には唐との交通が可なりに頻繁であつたので、佛教の他の各派の教義と共に、此の念佛の思想も自然と傳はつて来たのであるが、今や時代の

要求に應じて其の勢力を張るべき機會となつたのである。新しい教を求むる人々は人生を悲觀したる人々である。家の榮えとか子孫の繁昌とかを祈るべき勇氣を失つた人々である。之に對して『厭離穢土』を説き『欣求淨土』を教ゆるのであるから、何人も皆耳を傾くべき筈である。

觀無量壽經には釋尊が韋提希夫人のために西方極樂世界の事を説いて居らるゝが、絶望の底に在つた夫人は之を聽いて其心に大なる歡喜を得た。夫人と頻婆娑羅王との間に生れたる阿闍世太子は提婆達多の爲に惑はされて王位を奪はんと企て、父王を幽閉して死に至らしめ、母の韋提希夫人をも同じく幽閉した。王も夫人も共に佛に歸依して善を積める人達である、然るに其の實子の爲に此の如き苦にあひ、又此の惡虐の行ひを勧めた者は佛の徒弟たる提婆達多である夫人が哭泣して

世尊我宿何の罪あつてか此の惡子を生める。世尊また何等の因縁ましまして提婆達多と共に眷屬となりたまへる。

と問うたのは尤もなことである。然るに釋尊が極樂世界の清淨なるさまを説き其の淨土に生を受くべき道を説き示さるゝに及んで、夫人は一切の苦を忘れて心に歡喜を生じ未曾有なりと歎じた。

奈良朝以來の舊い佛敎に満足せずして新しいものを求めて居る人達は、その程度に於てこそ種々の差があるけれども、此の韋提希夫人と似通つたる氣分の人達である。彼の淨土三部經を中心としたる敎が歡び迎へられたのは當然のことである。生活に惱むもの、壓迫に泣くもの、競争に負けて失望したもの、地位や權勢の爭奪に疲れ切つたもの、此等の群に向つて『此世の貴賤貧富とか優劣強弱とかの區別は深い意味を有するものでは無い。斯る假の世界の外に眞の

世界がある。その世界に永遠の平和と幸福がある』と説くのであるから、誰も喜んで其の敎の下に集つて來る筈である。されば空也上人が叡山を出て京都の街に立ち、往來の人に向つて念佛を勧むるに及んで、之に歸依する者は續々と加はつて來た。しかし念佛といふことが上下を通じて普く貴ばるゝやうになつたのは、慧心僧都の出でからのことで、

本師源信ねんごろに 一代佛敎のその中に

念佛一門開きてぞ 濁世末代敎へける

と親鸞上人は讚して居る。此人は空也よりは學殖もあり、一般の信用も篤かつたのであるから、其の感化は頗る大きかつた筈である。

彼の空也は叡山の僧であるが叡山を出て念佛を唱へたのであるが、慧心僧都に至つては叡山に居て念佛を唱へたのである。勿論僧都は天台宗の學者で、日

蓮上人も

法門又二つに分れたり。檀那僧正は教を傳ふ、慧心僧都は觀を學ぶ。されば教と觀とは日月の如し。教は淺く觀は深し。されば檀那の法門は廣くして淺し、慧心の法門は狭くして深し。——四條金吾殿御返事

と評したる如く深い研究を積んだ人である。その著述の中にも『一乘要決』をはじめとして、天台の教義に關するものも少くない。しかし最も大なる影響を一般に與へたものは永觀二年、四十三歳にして作つたる『往生要集』である。その劈頭には

夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり、道俗貴賤誰か歸せざる者あらん但し顯密の教法その文一に非ず、事理の業因その行惟れ多し、利智精進の人は未だ難しと爲さず。予が如き頑魯の者豈に敢てせんや。是故に念佛の一門

に依りて聊か經論の要文を集む。之を披きて之を修せば覺り易く行じ易からん。

とある。僧都の如き博學多識の人が自ら愚にして顯密二教の教義を究むる力なしといひ、念佛の一門に依るの外はないといふのである。多くの人が各自の分別をすて、偏に彌陀の力に依るの外はないといふ念を起したのも當然の事である。

此の慧心僧都は宮廷の間にも歸依者が少からずあつたので、其の唱へたる念佛の教は忽ちにして世に弘まつた。法然上人が專修念佛を唱へたのは此の往生要集が出来てから凡そ二百年の後である。叡山には前に密教が入つて居たのであるが、慧心僧都は顯密不二の義を立て、大日と彌陀とは二にして而も二ならずといふ立場から念佛を勧めたのであるから、格別の紛亂も起きずして念佛の

思想がまた叡山に弘まった。僧都の亡き後にも其の流を弘むものは續々として起つた。時代の要求に應ずるものであるから、此の念佛の教が勢力を得て來たのに少しも不思議はない。けれども是れは叡山を開いた傳教大師の主張とは兩立せぬものである。「覺り易く行じ易き」ものが必ずしも絶對の眞理ではない。如何なる困難を凌いでも法華經を世に弘めて、此の苦惱に充ちたる娑婆世界を寂光淨土に化せしめなければならぬといふのが、傳教大師の主張である。

淺きは易く深きは易しとは釋迦の所判なり。淺きを去りて深きに就くは丈夫の心なり。——法華秀句

といふ傳教大師の言には其の凛乎たる決心が溢れて居る。今は叡山にその面影も見られなくなつてしまつた。

四、法華經の行者

二十年の研鑽を重ねて法華經が最勝の經であることを知ると共に、其の廣宣流布すべき時は末法の世の初めであるべきことを知つて、日蓮上人は非常なる歡びを感じた。しかし此時に當つて此經を弘むべき人の出ざるべからざる叡山に天台傳教の精神の全く亡びたのを知つて又深く哀みもし嘆きもした。

天台の教釋を習ひ失ひて法華經に背き大謗法の罪を得るなり。——立正觀鈔
とまで思へば、叡山の學徒はもはや頼みにならぬのである。然らば法華經は切角に弘まるべき時機に際しながら世に弘まらずして終るべきであるか。此し弘まらずして終るならば、釋尊の豫言は空になつてしまはなければならぬ。此の如くに思案して、上人は徒らに嘆き哀むの愚なることを感じた。「苟くも此の法

華經の貴いことを知つた者は、之を世に弘むべき責を負うて居る者である。今日本國中に、此經の貴いことを知る者が吾より外にないならば、此經を世に弘むる魁をなす者は、吾を措てまた求められぬではないか。斯く日蓮上人は此の最も貴い天職を身に負うて此國に生れて來たものであることを自覺したのである。

但し此の天職を果すのには最も堅固なる覺悟を要するのである。法華經の法師には此經を弘むべき法師の心得を説いて、

如來の滅後に四衆の爲に是の法華經を説かんと欲せば、……如來の室に入り如來の衣を著し如來の座に坐して、爾して乃し四衆の爲に廣く斯經を説べし。如來の室とは一切衆生の中の大慈悲心是なり。如來の衣とは柔和忍辱の心是なり。如來の座とは一切法空是なり。是の中に安住して然して後に不

懈怠の心を以て諸の菩薩及び四衆の爲に廣く是の法華經を説くべし。

といつてある。即ち一切衆生を盡く救はんどの大慈悲心をもたなければならぬ。又如何なる危難にも迫害にも堪へて少しも瞋恚の念を起さぬといふ覺悟がなければならぬ。又絶對の眞理を悟り萬有の實相を明かにして居なければならぬ。此の三條件を具へた上に常に懈怠の念なくして此經を弘めなければならぬのである。此の如きは尋常一様の人の能くすべき所ではない。

又法華經の寶塔品には六難九易が擧げてある。例へば恒河の沙の數ほどの經典を盡く暗んずるは大なる難事である、また須彌山を取つて擲つ如きは大なる難事である。その外難事の中の難事ともいふべきことを九つも數へ上げて、此等も末法の世に生れて法華經をよく持ち、よく弘むるの難きに比すれば寧ろ易いといひ、

此經は持ち難し、若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す、諸佛もまた然なり。是の如きの人は諸佛の歎めたまふ所なり。是れ則ち勇猛なり、是れ則ち精進なり。

といつてある。是れ程の覺悟がなければ法華經を世に弘むるといふ大任は果されぬのである。又勸持品に擧げられたる諸難の如きは固より豫期しなければならぬことで、

我身名を愛せず、但だ無上道を惜む。

といふ献身的精神を有すると共に、

我は是れ世尊の使なり、衆に處するに畏るゝ所なし。

といふ抱負をもたなければならぬのである。法華經を弘めんとして起つ前に、自ら此の難事に堪ふべき力ありや否やを顧みなければならぬ。中途で挫折する

くらゐならば、初めよりして起たぬ方が勝つて居る。

斯る難事である故に釋尊は容易に此事を許されず、特に所謂地涌の菩薩を召し出して『再び末法の世に出て此經を弘めよ』と命せられたのである。此の諸菩薩は靈鷲山に集つたる大衆が

巨身にして大神通あり、智慧思議しがたし。其の志念堅固にして大忍辱力あり、衆生の見んと樂ふ所なり。——涌出品

と讚嘆した程に徳の高い人々であつた。又釋尊も之を稱讚して常に頭陀の事を行じて靜なる處を志樂し、大衆の憒鬧を捨て所説多きことを樂はず。——涌出品

と仰せられた。佛菩薩が世に出て法を説くのは衆生の苦み惱めるを見て、如何しても其儘に棄て置くことが出来ぬところから、已むを得ずして之を教へ導か

んが爲に説くのである。自己の智に誇り能に驕つて之を世に輝かさんが爲に説くのではない。自己の希望からいへば静なる處に居て獨り其道を樂み、多く説かず多く語らずして居たいのである。斯く世に對して更に求むる所がないから自ら信する通りを少しも枉げず飾らずに説くことが出来るのである。『所説多きを樂はず』の一語は深く味ふべきである。更にまた

志念力堅固にして常に智慧を勤求し、種々の妙法を説きて其心畏るゝ所無し。——涌出品

ともある。此の如き人であれば其の周圍の境遇の爲に少しも其心を動すことは無い。得意の境に在つても驕らず、失意の境に在つても哀まず、たゞ一切衆生を救護せんことをのみ念とする者である。

末法の世に出て此經を弘むる者は、此の菩薩の再生であるといふ自覺を以て

世に立たなければならぬのである。法華經は末法の世に入つて普く世間に弘まらるべきに定まつて居るが、その廣宣流布に魁する人の身には種々の迫害が蝟集すべきことも亦た定まつて居る。其の難に堪へ苦を忍んで廣宣流布の機運を開く功德は莫大なものであるが、此の大任に當るに就ては非常なる覺悟と決心を要することである。

日本國に此を知れる者はたゞ日蓮一人なり。これを一言も申し出すならば、父母兄弟師匠に國主の王難必ず來るべし。いはすば慈悲なきに似たりと思惟するに、法華經涅槃經等に此二邊を合せ見るに、いはすば今生は事なくとも後生は必ず無間地獄に墮つべし。いふならば三障四魔必ず競ひ起るべしと知りぬ。二邊の中にはいふべし。王難等出來の時は退轉すべくば一度に思ひ止むべしと、且くやすらひし程に、寶塔品の六難九易これなり。我等程の少力

の者須彌山はなぐとも、我等程の無通の者乾草を負ひて劫火にはやけずとも我等程の無智の者恒沙の經々をばよみ覺うとも、法華經は一句一偈も末代に持ち難しと説かるゝはこれなるべし。今度強盛の菩提心を起して退轉せじと願しぬ。——開目鈔

といふは實に此際に於ける日蓮上人の心事を最も率直に告白せるものである。既に法華經の世に弘まるべき時に際會したる悦びは感じて居ても、自ら起つて之を世に弘むるの大事に當るべきか否かを決しかねて、所謂「二邊の中に」躊躇したるは無理ならぬことである。法華經を弘むるためには、今まで法華經を排斥して居た諸宗と鬪はなければならぬ。それが爲に如何なる迫害が一身に集つても更に驚くには足らぬが、父母兄弟師匠にまで難儀をかくることは、情誼に厚い上人の忍び難く思つた筈である。けれども涅槃經の中には嚴しい佛の訓

戒がある。

法を壞る者を見て置いて呵責し駈遣し舉處せずんば、當に知るべく是の人は佛法の中の怨なり。若し能く駈遣し呵責し舉處せば是れ我が弟子眞の聲聞なり。

正しい法を壞る者を其儘に置いて之を責めもせぬものは、たとへ自身に佛法の敵とならずとも、敵の同類と見做さるべき者であると、佛は嚴しく戒められたのである。また

此の如く種々に法を説くも然も故師子吼を作すこと能はず、非法の惡人を降伏すること能はず。是の如き比丘は自ら利し及び衆生を利すること能はず。當に知るべし是の輩は懈怠懶惰なり。能く戒を持ち淨行を守護すと雖も當に知るべし是の人は能く爲す所無からん。

ともいつてある。自ら利し他を利すること能はずして、たゞ大なる過失なくして一生を終ることを求むるは、佛の大乗の教を學ぶ者の爲すべき所ではない。一切衆生を救はんが爲に世に出て法を説きたまへに佛の大慈悲心に感激するならば、自身も奮つて其の化導を賛げやうと努めなければならぬのである。輕重をよく／＼思案すれば、一切衆生のために力を盡すことは一身の情誼に殉するよりも遙に重い。されば『王難等出來の時は退轉すべくば一度に思ひ止むべし』と考へて、終に『強盛の菩提心を起して退轉せじ』と思ひ定めたのである。之が爲に或は父母兄弟等に難をかゝることも、吾が身命にかへて正法を弘むる功德は莫大なもので、それが父母兄弟等の身にも酬ふべきであると思へば、もはや躊躇するには及ばぬ。

我並びに我が弟子諸難ありとも、疑ふ心なくば自然に佛界にいたるべし。天

の加護なき事を疑はざれ、現世の安穩ならざる事をなげかざれ。我が弟子に朝夕教へしかども、疑ひを起して皆すてけん。拙き者のならひは約束せし事をまことの時は忘るゝなるべし。妻子を不便と思ふ故現身に別れん事をなげくらん。多生曠劫に親みし妻子には心と離れしか、佛道の爲に離れしか。いつも同じ別れなるべし。我が法華經の信心を破らずして靈山に參りて返りて導けかし。——開目鈔

といふは後に上人が其の弟子檀那を戒めた所の語であるが、上人自身に於て最初から堅固なる決心を有せる故に、此の如き痛切なる訓戒を與へることも出来たのであらう。

此の決心を固めて建長五年の春、日蓮上人は叡山を下つて故郷の安房へ歸つた。傳教逝いて後四百三十年、叡山には法華經の精神は亡びたが、日蓮一人の

力を以て再び此の日本國に法華經の顯はるべき機運を開かうといふ抱負を以て大小幾多の難を豫期して故郷に歸つたのである。釋尊の御本意をはじめて發揮したる天台、それを紹述したる傳教の努力は空に歸すべきものでない。

天台大師は釋迦に信順し、法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し、法華宗を助けて日本に弘通す等云々。安州の日蓮は恐らく三師に相承し、法華宗を助けて末法に流通す。三に一を加へて三國四師と號く。——顯

佛未來記

といふは、此時より以後上人の自ら許せる所であつた。清澄山には師の道善房をはじめ、今までの因習に囚はれて、教の邪正を辨ふる力のない人々のみである。しかし初めて受戒して佛道に入つたのは此山である。また虚空藏菩薩に智者たらんことを祈つたのも此山である。たとへ吾が言に耳を傾ける者が無から

うとも、法華經を説き弘むる手始めとして、此山に歸つて自ら究め得た所を語らなければならぬと思ひ定めて歸つたものであらう。後年上人は身延に住むうちに、當時のことを追憶して、

此を申さば必ず日蓮が命となるべしと存知せしかども、虚空藏菩薩の御恩を報せんが爲に建長五年四月二十八日安房國東條郷清澄山、道善之房持佛堂の南面にして、淨圓房と申す者並に少々の大衆にこれを申しはじめて、其後二十餘年が間退轉なく申す。——清澄寺大衆中

と清澄の人々へ書を送つた。

上人の説は豫期の通り清澄山では容れられなかつた。而も其の法華經を尊んで阿彌陀佛を誹謗したのが不届であるといふので、地頭の東條景信は非常に憤り、上人の身に危害を加へんとしたのを、師の取り做して辛くも免れた。

四、法華經の行者

去る建長五年四月二十八日より今弘安二年十一月まで、二十七年が間退轉なく申しつより候事、月のみつるが如く潮のさすが如く、はじめは日蓮只一人唱へ候ひしほごに、見る人あふ人聞く人、耳をふさぎ眼をいからし、口をひそめ手を握り齒をかみ、父母兄弟師匠善友もかたきとなる。後には所の地頭領家かたきとなる。——中興入道消息

とは後に上人の自ら語れる所である。法華經を弘むる者に迫害の加はるべきは固より定まつたことで、更に驚くべきでは無い。上人は故郷を去つて鎌倉に來り、

經文に任せて權實二教のいくさを起し、忍辱の鎧を着て妙教の劍を提げ、一部八卷の肝心妙法五字の旗をさし上て、未顯眞實の弓を張り正直捨權の箭をばげて、大白牛車に打乗て權門をかつばと破り……如說修行鈔

といふ如き勇ましい法戦を開いたが、二十年に互れる研究の結果として得たる所の確信が、如何なる出來事にあつても動搖しやう筈はなく、難にあふ毎に勇氣はいよく加はつた。

當時の鎌倉は幕府の所在地で、佛教もことに繁昌の有様であつた。執權北條氏は初代の時政以來信心のあつた人が無いでは無かつたが、時賴時宗の父子は殊に篤信の人として知られて居る。此の父子は熱心に佛教の教理を研究し、多く經論を読み又高僧碩徳に就て常に教を受けて居たので、其の佛教興隆のために盡力したことも前代の比ではなかつた。日蓮上人が鎌倉へ來て庵を結んだのは時賴が執權になつて八年目である。

佛閣 薨を連ね經藏軒を並べ、僧は竹葦の如く侶は稻麻に似たり。崇重年薨り尊貴日に新なり。——立正安國論

と形容された通りの状況で、宋から来て歸化した道隆をはじめ有力なる僧侶も少からず居た。其の中へ日蓮上人は單身で現はれ来たのである。

然るに日蓮は何れの宗の元祖にもあらず、又末葉にもあらず、持戒破戒にも闕けて無戒の僧、有智無智にもはづれたる牛羊の如くなる者なり。——妙密上

人御消息

と上人自身にいつた通り、清澄山を出てからは何れの宗にも屬せず、一人として縁故の者もなく、勿論保護を加ふるやうな人もなく、地位もなく勢力もなく誰も名を知らぬ三十二歳の青道心である。若し當時多くの歸依者を有して居た念佛とか禪とかの門流に入つて力を盡したなら、久しからずして其の非凡の材幹を認めらるゝやうにもなり得たらう。然るに今は其等諸宗を斥けて新に法華經弘通の路を開かうといふのである。耳を傾くる者などの一人もありさうには

思はれぬ。

けれども上人には確信があつた。法華經を末法の世に弘むる者は「則ち如來の使なり如來の所遣として如來の事を行するなり」と佛の仰せ置かれたものである。佛の御言葉に偽りがなければ、如來の使の努力が空に歸すべき筈はない。たゞ努力が續きさへすれば宜い。懈怠の念が起りさへしなければ宜い。縁故の者はなくても、保護を加へる人はなくても、たゞ佛の加護をのみ頼みとして法を説けば宜いのである。

若し我が滅度の後に能く此經を説かん者には、我化の四衆、比丘比丘尼及び清信士女を遣はして法師を供養せしめ、諸の衆生を引導して之を集めて法を聽かしめん。若し人惡刀杖及び瓦石を加へんと欲せば、則ち變化の人を遣はして之が爲に衛護と作さん。若し説法の人獨り空閑の處に在りて寂寞にし

て人の聲無からんに、此經典を讀誦せば、我爾時に爲に清淨光明の身を現せん。若し章句を忘失せば爲に説きて通利せしめん。——法華經法師品

と佛の説き置きたまへる所を信する以上は、少しも憂ふる所なく又畏るゝ所なくして、たゞ法華經を弘むべきのみである。

日蓮上人は斯く信するが故に、獨り鎌倉の街頭に立つて其の二十年を費して究め得た結果を、最も大膽に、また最も率直に説いた。最初は何人も耳を借さうとしなかつた。それでも上人の説法は續いた。次第に目を側て、嘲り笑ふ者が出来た。又口を極めて罵りながら行きすぎる者も出来た。上人はこれ正しく勸持品に『諸の無智の人の惡口罵言等し』とあり『我を罵言毀辱せん』とある通りであるを知つて、愈以て自身が法華經を弘むべき大任を負ふ者であるといふ確信を固くした。又時には石や瓦を投げつくる者もあつたが、是れ正しく不

輕品に『杖木瓦石を以て之を打擲す』とあるに當ると知つて、少しも瞋恚の念を生せずして之に堪へた。

日蓮は過去の不輕の如く、當世の人々は彼の輕毀の四衆の如し。人はかはれども因は是一なり。……いかなれば不輕の因を行じて、日蓮一人釋迦佛とならざるべき。——佐渡御書

とは上人の常に深く信じて居たところで、又日蓮と不輕菩薩とは位の上下はあれども同業なれば、彼の不輕菩薩成佛し給はゞ日蓮が佛果疑ふべきや。

——阿貴訪法滅罪鈔

といふが如き語もある。同業とは即ち多くの迫害に堪へて正法を弘むることをいふのである。

不輕菩薩の事蹟は法華經の不輕品に出て居る。それは日蓮上人の爲す所と甚だ相類せざるが如くに見えるが、その精神に於て全く一致して居るのである。不輕菩薩は凡そ行きあふ人毎に比丘であれ比丘尼であれ、若くは優婆塞優婆夷であれ、盡く之を禮拜して、

我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず。所以はいかん、汝等皆菩薩の道を行じて當に作佛することを得べし。

といつた。之を聞く者が嘲弄されたやうに感じて却て怒りを發し、或は之を罵り或は之を打ちなどしたけれども、不輕菩薩は遠く逃げ走りながら『我敢て汝等を輕しめず』といつて禮拜することを止めなかつた。これは人々が具有する所の佛性を貴んで禮拜したのである。人には賢愚貴賤さまざまの別があるけれども、一人として佛性を具有せぬものは無い。涅槃經の中には有名なる

一切衆生悉く佛性を具はす

といふ語がある。一切衆生といふ中には如何なる惡人も漏れぬのである。たとへ如何なる罪過を犯しても、その心の底にある佛性が泯び盡すことは無い。されば此の佛性を養つて長せしめさへすれば、後には佛の境界に近づくことも出来るものである。但し之を養ふの道は不輕菩薩のいふ如く『菩薩の道を行する』ことである。菩薩の道とは大乘の經典の中に説き示さるゝ所である。即ち大乘の教を信じて修行を怠らぬ者にして、初めて其の具有せる佛性を開發せしむることが出來得るのである。

切角に貴い佛性を具へながら之を知らず、たゞ煩惱にのみ役せられて一生を過す者の多いのは哀むべきである。佛は之を哀愍せらるゝの餘りに世に出て法を説かれたので、

我本誓願を立て、一切の衆生をして我が如く等しくして異ること無からしめ

一切衆生悉く佛性有り。

んと欲しき。——法華經方源品

とは釋尊の明言したまふ所である。『我が如く等しく』といへば釋尊と同等になることである、即ち佛の境界に達したことである。釋尊は一切の人に皆其の具有せる佛性を開發せしむべき道を教へんが爲に世に出られたのである。而してなほ

諸佛は語異ること無し、唯一にして二乘無し。——同上

とあるに依て見れば、凡ての佛の説法の目的は全く同一なのである。斯る大悲心を空しくして、切角與へられたる教を信せぬ者の多いのは更に哀むべきことである、彼の不輕菩薩が行きあふ人毎に之を禮拜したのは、彼等に向つて強い警告を與へたものである。『汝等は貴い佛性をもつて居る。若し大乘の教に

よつて修行すれば皆佛になることの出来るものである。然るに其の道を求めずして永く凡夫で終るのは愚の至りではないか』といふ痛切なる警告である。

日蓮上人もまた一切衆生が悉く佛性を有せることを知り、大乘の教によつて其の佛性を開發せしめ得べきことを知つて居た。而して二十年の研究を重ねた結果として、末法の世に入つて得益あるべき教は諸大乘經典中に於て、唯だ法華經あるのみといふ確信を得た。然るに當世の人が此の法華經を信せずして釋尊の大慈悲心を空しくして居る故に、世に不祥の出來事のみが多いのを見て深く之を悼んだ。之を悼むのあまりに如何にもして之を覺醒せしめんとて、身命を惜まぬ覺悟をもつて起つたのである。即ち不輕菩薩が人々を禮拜したのと全く同じ心を以て、人々の具有せる佛性を敬ひ貴んだのである。但し教は時に應じて弘めなければならぬ。彼の不輕菩薩の時と末法の世とは世態人情が全く

ちがふ。されば末法の險惡極まる世に際して、不輕菩薩の如く唯が禮拜して居たのでは、いつ迄も人々を覺醒せしむることは出来ぬ。故に日蓮上人は人々の信仰の誤れることを忘憚なく直言して、其の覺醒を促さんと努めたのである。其の言の痛烈を極めたのは、即ち上人が切角に佛性を具へながら佛と成るべき道に遠ざかれる人々を悼むの念の痛切なることを證するのである。斯く不輕菩薩と同じ精神を以て人々に對し、而して不輕菩薩と同じく種々の迫害に値つたのであるから、之を『同業』といつたわけである。彼の不輕菩薩は斯る迫害に堪へて人々に對する警告を續けたる功德により、後には佛に成つたとある。然らば日蓮上人が『佛果疑ふべきや』と悦んだのも不思議ではあるまい。形の上から見れば上人の一生は苦難の一生である。しかし能く其心を取れば、實に歡喜に充ちたる一生といふべきである。

五、折伏逆化

日蓮上人の當時に於て日本國の佛法が十宗に分れて居たことは、既にいつた通りである。但し十宗の教理はそれ々に異つて居るが、十宗が皆同等の勢力をもつて居たわけではない。全く廢れて世に行はれぬ宗もあり、或は緩に形ばかり残つて居た宗もある。若し當時の一般民心を支配する力のある宗を求めれば四宗あるのみであつた。即ち念佛と禪と眞言と律とである。念佛の勢力は前にいつた通りである。法然上人の世に崇敬せらるゝ有様は、一天の貴賤首を傾け、四海の道俗掌を合せ、或は勢至の化身と號し、或は善導の再誕と仰ぎ、一天四海に靡かぬ水草なし。智慧日月の如く世間を照して肩を並ぶる人なし。——念佛無間地獄鈔

と日蓮上人の評したる如くである。次に禪は念佛の如くに一般的ではなかつたが、武士の間に歸依者が多かつた。殊に宋が蒙古の爲に壓迫されて滅亡に瀕して居た時なので、宋の高徳なる禪僧の來朝する者もあり、北條時頼父子が深く之に歸依するといふ有様で、其の宗勢は日に隆昌に向つて行つた。また眞言宗は平安朝以來養ひ來つた勢力であるから、念佛や禪の隆盛に壓倒はされ乍らも、なほ侮るべからざるものであつた。殊に其の教義は諸宗の中に於て最も特色のあるもので、久しく天台宗を壓服し來つた關係もあるから、日蓮上人の立場としては最も注目しなければならぬものである。終りに律宗は以上の三宗と比すべき程に有力なものではなく、特に關東には殆ど行はれなかつたのであるが、眞言宗から良觀上人が出て律を深く究め、之を關東に弘むるに及んで、漸く勢力を有するやうになつた。此の良觀は鎌倉の極樂寺に住するに至つ

て生佛の如くに尊敬せられた。即ち

二百五十戒堅く持ち、三千の威儀を整へたり。世間無智の道俗、國主より始めて萬民に至るまで、地藏菩薩の伽羅陀山より出現せるか、迦葉尊者の靈山より下來するかと疑ふ。——下山御消息

と日蓮上人の評せる如き有様であつた。

今日蓮上人は法華經を日本國中に弘めんとして起つたのである。最初はいかに微力であらうとも、終には國中盡く之に歸すべきことを理想として起つたのである。

刹へ廣宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華經と唱へん事は、大地を的とするなるべし。——諸法實相

といふ如き抱負は最初からもつて居たのである。然らば法華經を弘むるに妨げ

となるものがあれば、之を排撃して進まなければならぬのは勿論である。法華經を信せぬものを疎外するのではない。之を盡く皆法華經に歸依せしめ、盡く皆釋尊の大慈悲に浴することを得しめんことを志とする故に、之に何故法華經に歸せざるべからざるかを示して、之を誘ひ導かなければならぬのである。然るに當時に勢力のあつた彼の四宗は、盡く法華經を排斥して其の教義を立て、居るものである。之を其儘にして置いては法華經を弘むるといふ聖業を成就することが出来ぬ。日蓮上人は四宗に何の怨みも無い。又自ら之に對抗して一派を開かうなどいふ念は全く無い。たゞ上人の志とする所は法華經を弘むることである。故に先づ法華經に對して加へられたる不當なる批判を打破しなければならぬのである。日蓮上人は法華經を護らんが爲に、今まで法華經の流布を妨げたる諸宗に對抗して立たなければならぬのである。

先づ最も勢力のあつた淨土宗に於ては法華經を絶對に排斥するのである。彼の空也とか慧心とかいふ人々は阿彌陀佛を信せよと勧めたけれども、其他の佛をも尊み、又淨土三部經以外の經をも究めたものである。然るに法然上人は此等の人々より數歩を進めて『專修念佛』を唱へたのである。即ち阿彌陀佛を念ずることのみに専心にして、其他を一切捨てよと主張したのである。先づ人々が佛と成るべき道が二つある。一は聖道門で一は淨土門である。多くの經論を究めて智を明かにし、之によつて佛の境界に近づかんとするものは聖道門である。たゞ偏に阿彌陀如來を信じ、その力によつて淨土に生れんことを期するものは淨土門である。前者は自力に依るが故に難行道である。後者は他力に依るが故に易行道である。末世に及んで人々の機根は下り、深遠なる教理を究め盡すことなどの出来やう筈はない。此の如くにして成佛を期すとも、其の望みを達

し得る者は『千中に一も無し』といふべきである。之に反して阿彌陀佛の力に頼つて往生を求むるならば『十即ち十生す百即ち百生す』といふべきである。それは無量壽經の中に示されたる彌陀の誓願によつて明かである。阿彌陀佛は斯く無量の慈悲を有したまふのであるから、専ら之に歸依して信心を勵まねばならぬといふので、正行と雜行との別を立て、正を勸めて雜を排するのである。

善導和尚の心によるに、往生の行多しと雖も大に分ちて二と爲す。一には正行、二には雜行なり——選擇集

其の正行を更に判てば五となる。即ち一に讀誦正行、二に觀察正行、三に禮拜正行、四に稱名正行、五に讚嘆供養正行である。讀誦正行とは淨土三部經ばかりを讀むこと。觀察正行とは一心に彌陀の淨土のみを思ふこと。禮拜正行とは

阿彌陀佛のみを禮拜すること。稱名正行とは専ら彌陀の名號のみを唱ふこと。讚嘆供養正行とは阿彌陀佛のみを讚嘆し供養することである。而して此の五種正行の中に就て正業と助業とを立てるのである。

正業とは上の五種の中の第四の稱名をもて正定の業と爲す。——選擇集
即ち南無阿彌陀佛と唱ふるのが正業で、其他は皆助業といひ、補助的のものである。以上の正行に對して雜行も五種ある。雜とは淨土三部經以外の經を讀むとか、阿彌陀佛以外の佛神等を禮拜するとかの類である。それで然れば西方の行者は須らく雜行を棄て正行を修すべし。

と斷言してある。

斯く雜行を斥けて『往生淨土の經を除きて已外、大小乘顯密の諸經に於て受持し讀誦すること禁するならば、勿論法華經を受持し讀誦することはなら

ぬのである。また「彌陀を禮拜するを除きて已外、一切諸餘の佛菩薩等及び諸の世天等に於て禮拜恭敬する」ことを禁ずるならば、釋尊を禮拜することもなからぬのである。又念佛以外の教に對して捨閉閣抛の四字を以て、盡く之を排斥するの意を現はしてある。(是も法然の著なる選擇集の中にある)捨とは雜行を捨てよとの義である。閉とは念佛以外の門を盡く閉づる義である。閣とは聖道門を闔いて淨土門に入れとの義である。抛とは諸の雜行を抛ちて正行に歸せよとの義である。此の如き教が勢力を得て居る間は、法華經の普く世に弘まるべき筈は決して無い。

次に眞言宗は法華經を最勝の經とすることに反對するものである。此宗に於ては佛敎を大別して顯敎と密敎との二となし、釋迦如來の所説は顯敎、即ち菩薩以下の者に教ゆるために説かれたる淺い教である。大日如來の所説は密敎即

ち「如來内證智の境界」を示されたる最も深遠の教であるといふのである。されば顯敎に依つて成佛を得ることは出來ず、成佛を期するものは何れも密敎に依らなければならぬことになる。随つて法華經の如きも大日經、金剛頂經、蘇悉地經の三部經に比すれば劣れるものとならなければならぬ。弘法大師は凡夫の境界から成佛を得たる境界までを大別して十住心となし、其の最下のもを異生羝羊心といひ、其の最高のもを祕密莊嚴心といひ、此の祕密莊嚴心はたゞ密敎を信ずるによりてのみ得らるべきものと説いた。而して天台華嚴等諸宗の教義を評して、

此の如きの乗々、自乗には佛名を得れども、後に望むれば戲論と作る。

といつた。「後に望むれば」とは、最後に説く所の祕密莊嚴心と比較して見ればといふ義である。戲論といふは眞實ならぬ説のことである。法華經若くは華嚴

經等に説かるゝ所は甚だ深遠なる如くに見ゆるが、大日經等と比較すれば戲論たるを免れぬといふのである。即ち諸經の中に就て勝劣を分てば、大日經等の三部を第一とし、之に次ぐものを華嚴經とし、法華經は第三位に置かるべきものとす。それで法華經を信するによつて得たるものを一道無爲心といひ、

諸の顯教に於てはこれ究竟の理智法身なれども、眞言門に望むればこれ即ち初行なり。

といひ、なほ之を貶して

此の如くの一心は無明の邊域にして明の分位にあらず。——秘藏寶論

といつて居る。若し此の如き教が眞實であるとすれば、法華經を諸經の王とすることは誤りとなるのである。法華經の廣宣流布に努むる者と眞言宗とは兩立せぬこと分明である。

以上の二宗は法華經の弘通を妨ぐることも最も大なるものであるから、日蓮上人の之に對する批判も特に嚴重であつた。此外に禪宗に於て教外別傳といひ不立文字といひ、大乘經典を輕んずる如きも、法華經弘通のためには捨て置けぬことである。其説の根據として傳ふる所によれば、釋尊が靈鷲山に居られた時に華を拈して衆に示されたが、衆は皆默然として居た。その時に摩訶迦葉のみが獨り破顔微笑したので、釋尊は之に對して、

吾に正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙の法門、不立文字、教外別傳なる有り。摩訶迦葉に付屬す。

と仰せられたといふ。また達磨の悟性論の中にも、

直に人心を指し見性成佛す教外に別傳して文字を立てず。

といつてある。此によつて教内と教外との別を立て、言語文字等によつて傳ふ

るを教内といひ、言語文字を離れて直ちに佛心を以て他の心に印せるものを教外の法といふのである。禪宗の外の諸宗は皆教内であつて、獨り禪宗のみが佛心を傳へたものであるから佛心宗といふ稱もある。斯く一切の經論を教内として貶し、以心傳心といふことを貴へば、法華經を弘通するのが最も貴い業といへぬことになる。

律宗は小乗教であるから、その教義によつて大乘諸宗に批判を加へることの出来やう筈はない。けれども戒律を守りさへすれば充分であるといふ考への者は進んで菩薩の道を求めやうとはせぬから、法華經の信仰に入ることなどの出来やう筈はない。法華經には

未だ得ざるを得たりと謂ひ、未だ證せざるを證せりと謂へり。——方便品
とて、小成に安んじて自ら足れりとするものを排斥してあるが、苟くも佛弟子

たる者は此の如き念をもつてはならぬ。たとへ戒を持つて犯す所なしとも、一切衆生の惱めるを見て之を救はうといふ念の缺けたものは、釋尊が法華經を末世の吾々の爲に説き遺されたる御精神を了解することの出来ぬ者である。(但し法華經を信じさへすれば戒を犯してもかまはぬといふ道理はない。此事に就ては別の章に於て詳論するつもりである。)

斯く考へて來ると、日蓮上人が鎌倉で法華經を弘むるために奮闘するに當つて當時に勢力のあつた諸宗の教義に批判を加へる必要のあつたことは自ら明になるであらう。佛法を弘むるの道は攝受と折伏との二途あるので、上人は其の折伏に主として力を用ゐたのである。勝鬘夫人は佛前に於て其の誓願を説いて、

我方を得ん時に、彼處に於て此の衆生を見れば、應に折伏すべき者は之を折伏

し、應に攝受すべき者は之を攝受せん。何を以ての故に、折伏と攝受とを以ての故に法をして久しく住せしむればなり。——勝鬘經

といつたとある。即ち攝受を折伏との二門が並び行はるゝことに依り、佛法が世に榮ゆべきだとの意である。唐の吉藏法師は之に註して、

剛強なるは伏すべし、伏して惡を離れしむ。柔軟なるは攝すべし、攝して善に住せしむ。故に折伏攝受と名くるなり。——勝鬘經寶窟

といつたが簡にしてよく其意を得て居る。攝受とは他の人をよく包容し、徳を以て次第に之を感化して、益善行を勵ましむるのである。折伏とは他の人の

過を責めて之を覺醒せしめ、正しい道に入らしむるのである。

吾が正法を世に弘めんとするに當り、正法を求むの志のある者にあふは是れ順縁である。正法に敵對する者にあふは是れ逆縁である。順縁の者を教化す

るは勿論であるが、逆縁の者をして其の邪見を翻さしめて正に歸せしむるやうに力を用ゆることが殊に肝要である。それを稱して逆化といふ。折伏は即ち逆化の道である。攝受は慈悲の業であるが折伏もまた大なる慈悲の業である。日蓮上人は自ら折伏を行すべく決心して、之が爲に如何なる迫害にあふも泰然として之に堪へた。

夫れ攝受折伏と申す法門は水火の如し。……無智惡人の國土に充滿の時は攝受を前とす、安樂行品の如し。邪智謗法の者の多き時は折伏を前とす、常不輕品の如し。譬へば熱き時に寒水を用ひ、寒き時に火を好むが如し。末法に攝受折伏あるべし、所謂惡國破法の兩國あるべき故なり。日本國の當世は惡國か破法の國かと知るべし。——開目鈔

とある如く、時の事情が或は攝受を必要とし或は折伏を必要とする。全く佛法

の何者なるかを知らぬ者は「無智惡人」である。善を行ふことを知らぬから惡人と呼ぶけれども、未だ誤つた教に染みて居るのでないから、よく之を導けば正しい道に入らしむることが出来るのである。既に佛法を學びながら邪義に囚はれて正法に背く者を「邪智謗法」の者といふ。之を折伏して其の邪義を捨てさせ、た上でなければ、之を正しい道に向はしむることは出来ぬ。無智の者の多い國が即ち惡國である、謗法の者の多い國が即ち破法の國である。上人は破法の國を救ふべき責任を負うて居ると自覺して世に立つたのである。

折伏を行じて敢て畏るゝ所なきは、是れ即ち一切衆生をして共に佛の大慈悲に浴せしむべき道なりと確信して居たからである。たとへ佛法を學ぶとも、佛の御本意に叶はぬ信じ方をして居ては、眞に佛法を信する者とはいはれぬ。譬へば父母に背ける子の如きものである。之を呵責して疾く父母のもとへ復歸せ

しめなければならぬ。日蓮上人は折伏を行すること二十八年の後に述懐して、

今日蓮は去る建長五年四月二十八日より、今年弘安三年十二月にいたるまで二十八年が間また他事なし。たゞ妙法蓮華經の七字五字を日本國の一切衆生の口に入れんと勵むばかりなり。此れ即ち母の赤子の口に乳を入れんと勵む慈悲なり。此れ又時の當らざるにあらず、已に佛記の五五百歳に當れり。天台傳教の御時は時いまだ來らざりしかども、一分の機ある故に多分流布せり。何に況や今は已に時いたりぬ。設ひ機なくして水火をなすとも、いかでか弘通せざらむ。——諫曉八幡鈔

といったが、其の烈しい折伏の聲は優しい母の慈悲心から出たもので、如何なる難にあふも更に屈しなかつたのは、老子の所謂「慈なるが故に能く勇なる」者である。

折伏を行する者に種々の迫害の集るべきことは獨り日蓮上人のみならず、むかしから法華經の行者の共に覺悟して居たことである。例へば天台大師の如きも、

行解既に勸めぬれば三障四魔紛然として競ひ起る。……隨ふ可からず、畏る可からず。之に隨へば人をして惡道に向はしむ。之を畏るれば正法を修するを妨ぐ。——釋訶止觀

といつた。天台大師にせよ傳教大師にせよ、既に諸宗の對立して居る間に立つて、法華經を弘むるのであるから、種々なる困難もあつた筈である。殊に此の法華經は釋尊が四十餘年の說法を終つて後に、今迄説いた所は皆方便の教である。明言せられ、今迄方便を説いたのは一切衆生を導いて眞實の教に歸せしめんが爲に外ならずとて、

如來の出たる所以は佛慧を説かんが爲の故なり。今正しく是れ其時なり。……今我喜んで畏れなし。諸の菩薩の中に於て、正直に方便を捨て、但だ

無上道を説く。——方便品

と態度を改めて説き出されたものである。故に法華經に依て宗を立てんとするには、是非とも此經と他の諸經との關係を明にしなければならぬ。而して同じく大乘教の中に於ても法華經に依つて立つものが實大乘で、餘經に依つて立つものが權大乘であることを明にしなければならぬ。權とは即ち方便の義である。

それ故に法華經を弘むる者は他の諸宗に對して折伏的態度にならざるを得ぬので、天台大師は

法華は折伏にして權門の理を破す。金沙の大河の復た廻曲なきが如し。

——法華玄義

といつたのである。此の如き關係よりして、法華經を弘むるものは自ら多くの敵を作らざるを得ぬのである。天台大師は南三北七とて、當時支那の佛教が十派に分れて居た者から敵對を受けながら之に屈せずし、終に天台宗の基礎を固めた。傳教大師は南都六宗の人々から種々の惡口罵詈を受けても屈せずして終に叡山の勢力を抜くべからざるものをした。しかし此の二大師に彼の勸持品に擧げられたやうな迫害が來なかつたのは、其時がまだ末法の世に入つて居なかつた爲である。日蓮上人は末法の世に入つて法華經を弘むるのであるから、彼の二師には見られなかつたやうな凡ての迫害が一身に集り來るべきこと勿論である。それに堪へ得るのは唯だ洪大なる慈悲心の力である。上人が佐渡へ流されて後に、今まで受け來つたる大難小難の數々を回顧し、

今末法の始二百餘年なり。……されば日蓮が法華經の智解は天台傳教には千萬が一分も及ぶ事なけれども、難を忍び慈悲のすぐれたる事はおそれをも懐きぬべし。——開目鈔

といつたのは、眞に其の心の底より出たる聲とも稱すべきものである。

六、日蓮が弟子檀那

法華經の行者たる日蓮上人は常に身を以て其の門下を率ゐた。而して其の門下の人々の異體同心の努力によつて、法華經の廣宣流布すべき機運を作らんことを奨めた。故に事毎に『日蓮が弟子檀那』と稱した。抑も佛法僧を三寶といふは、此の三者の力によつて一切衆生が救護せらるべき故である。

一切衆生煩惱業障都て覺知せず、苦海に沈淪して生死窮まりなきも、三寶世に出て大船師となり、能く愛流を截ちて彼岸に超昇せしむ。諸有の智者悉く皆瞻仰したてまつる。——心地觀經

佛と、佛の説きたまへる法と、法を弘むる僧の力とは共に限りなく貴い。而して僧とは『和合』の義である。相和合したる人々の力を協せて能く法を世に弘む

るのである。されば僧とは一心同體となれる團體の義である。

總じて日蓮が弟子檀那等、自他彼此の心なく水魚の思ひを成して、異體同心にして南無妙法蓮華經を唱へ奉る處を生起一大事の血脈とはいふなり。然も今日蓮が弘通する處の所詮是なり。若し然らば廣宣流布の大願も叶ふ可き者か。——生死一大事血脈鈔

といふは眞に和合の力を悉せる語である。

『日蓮が弟子檀那』といはずに、たゞ『日蓮が弟子』とも度々いつてあるが、總じて上人に歸依したものは『日蓮が弟子』である。その中でなほ分けて呼ぶ時には出家したものゝを『弟子』といひ、在家にして歸依してゐる者を『檀那』といふ。在家と出家と姿はかはるけれども、法華經の行者たることに何の等差もないのである。最初は日蓮上人唯一人の力によつて弘められたる法華經が漸く海の内

外に弘まり來つたのは、經の力と上人の力とに依るとはいへ、共に不惜身命の覺悟を以て力を協せたる其の門下の人々の功勞をも没することは出来ぬ。

日本國の人々は多人なれども同體異心なれば諸事成せんこと難し。日蓮が一類は異體同心なれば人々少く候へども大事を成じて、一定法華經ひろまりなんと覺え候。惡は多けれども一善にかつ事なし。譬へば多くの火あつまれども一水には消えぬ。此一門もまたかくの如し。——異體同心事
と上人が喜悅したのも尤もである。

但し其の門下に種々の優れたる人々の集つたのは、其の師の徳の高きことを知るべき何よりの證據である。上人は折伏を特色として世に立つたのであるが折伏も攝受も共に慈悲の業であることは前にいふ通りである。折伏し得る人は勿論攝受し得る人でなければならぬ。諸宗に對する上人は折伏の人として最も

卓越せることを遺憾なく現はして居るが、其の門下に對する上人は、また攝受の人として如何に貴むべきものであつたかを最もよく示して居る。

佛に成る道は善知識にはすぎず、我が智慧何かせん。たゞ溫き寒きばかりの智慧だにも候ならば、善知識大切なり。而るに善知識にあふ事が第一の難き事なり。されば佛は善知識に値ふ事をば一眼の龜の浮木に入り、梵天より絲を下げて大地の針の目に入るにたとへ給へり。——三三藏祈雨事

といへる上人の言を、門下の人々はいかにも尤もと思ひ合せたことであらう。

法華經には師弟の縁の一世のみならぬを説いて、

在々の諸の佛土に常に師と俱に生ず。——紀城論品

とあるが、善い師に値つて限りなく貴い教を聽く者は、誰も此世のみならぬ縁と感すべきことである。

日蓮上人の門下には種々なる人物が集つたが、其中でも特に有力なる人々は上人の鎌倉へ來てから程なく歸依した者で、何れも永く誠意を以て之に仕へたのはまことに貴い事である。其の最初の人は六老僧の隨一として知られたる日昭である。日昭は下總の印藤氏といふ由緒ある武士の家に生れ、十五歳で出家したが幾くもなく母の縁によつて近衛左大臣家の猶子となり、叡山に學んだ。才學共にすぐれ等輩の間に重んぜられて居たが、學の進むに隨つて慈覺智證の諸師が法華と眞言とに就て立てた『理同事勝』の説に疑を懷き、之を人々に質した。然るに誰も其の疑を解くに足るだけの答を與ふる者はなかつた。たゞ其の間に『それは曾て蓮長の説いた事ではないか』といふ者があつた。日昭は其の蓮長の事をいろ／＼と聞くにつけて深く景慕の念を起し、今は關東に歸つて居ると聞いて、是非とも親しく逢つて其説を叩かうと決心し、遙々と鎌倉松葉ヶ谷

の庵へ尋ねて來たのは、建長五年十一月のことであつた。日昭は承久三年の生れであるから日蓮上人より一歳の年長であつたが、一見して上人に推服し、直ちに請うて弟子となつた。日昭といふ名も勿論此時に與へられたものである。鎌倉へ來て僅かに數ヶ月の後に、日昭の如き有力なる弟子を得たことは、大なる悦びであつたに違ひない。法華經には佛が常に法師の身を護りたまふべきことを説いて、

我餘國に於て化人を遣はして其が爲に聽法の衆を集め、亦た化の比丘比丘尼優婆塞優婆夷を遣はして其の説法を聽かしめん。是の諸の化人法を聞きて信受し、隨順して逆はず。——法師品

とあるが、それは決して空言ではなかつた。法華經を弘むる者の身には惡口罵詈が集まるばかりではない、其説を聽いて信受し隨順して違はぬ者もまた集り

來るのである。日昭は學識も充分あり、且其の人となりも重厚沈着であつて、師が地涌の菩薩の再誕として、此國に法華經を弘むべき天職を果すために出現したことを固く信じて居た。されば此より數十年の間、師の身及び門下の身上に如何なる事が起つても更に驚かず、一意専心に門下の青年の人々を指導し教養することに力を用ゐた。日蓮上人が少しも後顧の憂なく奮闘し得られたのは一に日昭の力といふべきである。されば上人も特に此人を重んじ、一門の人達も皆先輩として推重して居たやうである。

翌建長六年に至り常木常忍が歸依したことも亦た大なる力であつた。彼の日昭が弟子の中で第一の先輩であつた如く、此の常忍は檀那の中で最も重きを爲した人である。富木氏は下總中山に領地を有し、此の常忍は（五郎右衛門尉胤繼といふ）鎌倉の問註所に出仕したこともある。日蓮上人よりは二歳の年長で

且つ上人の生家と親交があつたので、其の遊學時代には彼此と保護もしたやうである。上人が弘安二年に身延から常忍の妻に送つた消息に、

はるかに見參らせ候はぬば覺束なく候。當時とても樂しき事は候はねどもむかしは殊にわびしく候ひし時より養はれ參らせて候へば、ことに恩重く思ひまゐらせ候。それに就ては命は鶴龜の如く、さいはひは月のまさり潮のみつが如くところ法華經にはいのり參らせ候へ。——富木殿女房尼御前御書

とあるに依つても其の關係は想像が出來やう。常忍は剛直な性質で夙くから念佛の信者であつた。それが日蓮上人に歸依して模範的な法華經の行者となつたのである。以て上人の徳の極めて高かつたことを推すべきと共に、又以て常忍其人の正直にして道を求むるの念に厚かつたことを知るべきである。

舍衛城の中に九億の家あり。三億の家は眼に佛を見たり。三億の家は耳に佛

有るを聞けども、而も眼に見ず。三億の家は聞かず見ざりき。——大智度論
といふは大に味ふべき話である。偉人の偉人たることを知るには、自身の心が濁り切つて居てはならぬのである。

常忍の一家は皆深く日蓮上人に歸依して居た。其の義子は出家して日頂といひ、六老僧の一人に數へらるゝまでになつた。上人が常忍を重んじて居たことは、佐渡に在つて作つたる觀心本尊鈔を

此事日蓮當身の大事なり。……佛滅後二千二百二十餘年未だ此書の心有らず。國難を顧みず五百歳を期して之を演説す。乞ひ願はくば一見を歴るの末輩師弟共に靈山淨土に詣て三佛の顔貌を拜見せん。……觀心本尊鈔副狀
といふ如き狀を添へて之に贈つたのを以ても知るべきである。此の如くに重んじて居ながらも、なほ上人は、

今常忍貴邊は末代の愚者にして見思未斷の凡夫なり。身は俗に非ず道に非ず

して禿居士、心は善に非ず惡に非ずして羝羊のみ。——忘持經事

といふ如く直言して其の信心を勵まして居る。其の師弟の間の恩誼は父子もなほ及ばぬものであつたと思はれる。

此の建長六年にはなほ一つの大に悦ぶべき事があつた。それは弟子に日朗を得たことである。此人も下總の生れで、日昭の姉の子である。日蓮上人の門下に歸したのは其の十二歳の時であるが、此より生涯の間至誠を以て師に仕へた。日蓮上人もまた之を愛すること骨肉もたゞならぬ様であつた。上人が佐渡へ配流せられた時は日朗も宿谷光則の邸の側なる土牢に囚はれたが、上人ことに之を悼み、

日蓮は明日佐渡の國へまかるなり。今夜の寒きにつけても、牢の内の有様思

ひやられて痛はしくこそ候へ。あはれ殿に法華經一部を色心共にあそばしたる御身なれば、父母六親一切衆生をも助け給ふべき御身なり。法華經を餘人の讀み候は口ばかり、言ばかりは讀めども心は讀まず、心は讀めども身に讀まず。色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ。——土龍御書

といひ送つて且慰め且勵ました。凡て上人の身に危害のある毎に、日朗は必ず艱苦を共にしたので、門下一同も深く其の真心に感じて之を敬重した。はじめて京都に日蓮上人の教を弘通したる日像をはじめ、日輪、日傳、日印といふやうな幾多の英傑が其の門下より出たのを見ても、日朗其人が大なる感化力をもつて居たことは想像に難くない。

鎌倉に數年を過す間に、有力なる門下も追々に出來た。即ち康元元年、上人三十五歳の暮までに歸依した人々の中には、鎌倉の人で四條金吾、進士善春、

安房の人で工藤吉隆、武藏の人で池上兄弟等があつた。此等はいづれも法華經弘通の歴史の上に特筆せらるべき人々である。中にも四條金吾は富木常忍と相並んで檀那中の重鎮として最も深く上人に信頼せられたる人である。其家は北條執權の一族なる江馬氏の重臣で、金吾は武道に秀でたるのみならず又よく醫術に達して居た。日蓮上人よりは六歳の年少である。正直一徹の氣質で最初は禪に熱心であつて、上人の法華經を弘むるを憤るのあまり屢々來ては論難したが、上人の説に服して門下に入つてからは、其の信心の堅固なること何人も驚嘆する所であつた。上人が龍ノ口に斬られんとした時には、殉死の覺悟を以て共に刑場へ赴いた。又主家に對しても精忠無二の臣であつて、文永九年二月執權時宗の兄の時輔が謀叛して、鎌倉に大なる騷擾の起つた際には、伊豆から箱根を越えて六十里の道を三時で鎌倉へ駆けつけ、主君光時を守護したといふ。

此の如く誠實の人であつたから其の信仰上の事で一時は主君の不興を受けたけれども、後には以前に倍する信任を受くるやうになつた。日蓮上人は諸檀那の中に於て最も金吾を親愛し、

返す返す今に忘れぬ事は頸切られんとせし時、殿は供して馬の口につきて泣き悲しみ給ひしをば、いかなる時にか忘れなん。たとひ殿の罪深くして地獄に入り給はゞ日蓮をいかに佛になれと釋迦佛こしらへさせ給ふとも用ゐまゐらせ候べからず、同じく地獄なるべし。日蓮と殿と共に地獄に入るならば釋迦佛法華經も地獄にこそ在しますらめ。暗に月の入るが如く、湯に水を入るゝが如く、氷に火をたくが如く、月輪に暗を投ぐるが如くこそ候はんすれ。——崇峻天皇事

といふ如く眞に一身同體の念を以て之を待し、之を教へ導くことも最も懇で

あつた。

題目の五字を日蓮はひひ弘め申すなり。此れ即ち上行菩薩の御使歟。貴邊また日蓮にしたがひて法華經の行者として諸人にかたり給ふ。是れ豈に流通にあらずや。法華經の信心を徹したまへ。火をきるに休みぬれば火を得ず。強盛の大信力を出して、法華宗の四條金吾四條金吾と鎌倉中の上下萬人、乃至日本國の一切衆生の口にうたはれ給へ。悪き名さへ流す、況んやよき名をや、何に況んや法華經故の名をや。——四條金吾殿御返事

といふ如き訓戒は幾度となく與へられた。是れ實に上人が法華經弘通の大任を果すべき人として、四條金吾に深く望みを屬して居たことを證するものである。又金吾が短慮にして兎角人と争ひを生じ易きを戒めて、

孔子と申せし賢人は九思一言とて、九度思ひて一度申す。周公旦と申せし人

は沐する時は三度握り食する時は三度吐き給ひき。たしかに聞しめせ、我ばし恨みさせ給ふな。佛法と申すは是にて候ぞ。一代の肝心は法華經、法華經の修行の肝心は不輕品にて候なり。不輕菩薩の人を敬ひしはいかなる事ぞ。教主釋尊の出家の本懐は人の振舞にて候ひけるぞ。あなかしこ、あなかしこ、賢きを人といひ、はかなきを畜といふ。——崇峻天皇事

といったこともある。又金吾が主君の勘氣をゆるされて出仕し、其の伴に立つたのを悦んで

圓教房の來りて候ひしが申し候は、江馬の四郎殿の御出仕に御伴のさふらひ二十四五、其中に主はさておき奉りぬ、ぬしの背といひ、面だましひ、馬下人までも中務左衛門尉第一なり。あはれ男や男やと鎌倉わらはははははにて申しあひて候ぞかたり候。——四條金吾御事

といったのなどは、宛ら慈父の愛子に對するが如き溫情が流露して居て、覺えず涙を催さしむるほどである。

金吾の妻も夫に劣らぬ道念の堅固な人であつたので、日蓮上人は常に之を稱揚し夫婦心を一にして益々信心を勵めよと奨めた。

弓弱ければ絃ゆるし、風ゆるければ波小さきは自然の道理なり。而るに左衛門殿は俗の中、日本に肩を並ぶべきものもなき法華經の信者なり。これにあひ連れさせ給ひぬるは日本第一の女人なり。法華經の御爲には龍女とこそ佛は思めされ候らめ。女と申す文字をばかゝるとよみ候。藤の松にかゝり女の男にかゝるも、今は左衛門殿を師とせさせ給ひて法華經へ導かれさせ給ひ候へ。——四條金吾女房御返事

といふ如き懇切なる消息もあつた。抑も上人の理想は法華經を此の日本國を中

心として、普く世界に弘むることであるが、それには先づ法華經の信仰によつて一致したる家を作ることが肝要である。斯る家は夫婦の協力によつて出来るものである。それ故に上人は金吾の妻のみならず、多くの女人に對して其の責の重大なることを諭し、或は

男は柱の如し、女は桁の如し。男は足の如し、女は身の如し。男は羽の如し、女は身の如し。羽と身と別々になりなば何を以てか飛ぶべき。柱倒れなば桁は地に墮ちなん。——千日尼御返事

といふ如くに教へ、或はまた

女人となる事は物に隨ひて物を隨ふの身なり。夫樂しくば妻もさかふべし。夫盗人ならば妻も盗人なるべし。是れ偏に今生ばかりの事にはあらず。世々生々に影と身と、華と果と、根と葉との如くにてをばするぞかし。——兄弟鈔

とも教へて、夫婦の相信じ相扶くることを頻りに勧めたのである。

此より年を経るに隨ひ弟子檀那の數も次第に増した。上人は自ら法華經の弘通に魁するといふ抱負をもつて居たと共に、上人と同じ信仰をもち、上人と同じ志を懷いて世に立つ者は皆廣宣流布の聖業を成就するために功勳のある者であるとし、いつも

抑も法華經をよく信じたらん男女をば、肩に擔ひ背に負ふべきよし經文に見えて候。……日蓮が頭には大覺世尊かはらせ給ひぬ。昔と今と一同なり。各は日蓮が檀那なり、争でか佛とならせ給はざるべき。——御前御消息
といふ如き態度を以て之に對したのであるから、人々の心服したのも道理である。上人はいつも物事の本末輕重を辨ふることを大切とし、世間の輕い事に就ては、

委細に經論を勘へ見るに、佛法の中に隨方毗尼と申す戒の法門は是に當れり此戒の心は、いたう事缺けざる事をば、少々佛教にたがふとも其國の風俗に違ふべからざるなし、佛一つの戒を説き給へり。一月水御書

といふやうにも教へたが、信仰の大事なことには就ては、

一生は夢の上、明日を期せず。いかなる乞食にはなるとも法華經にきずをつけ給ふべからず。——四條金吾御返事

といふやうに極めて嚴格であつた。

上人は二十年の研究を積んだにも拘らず、少しも其の學識に誇る事無く、『天台傳教には千萬が一分も及ぶことなし』といひ、或は『有智無智にもはづれたる牛羊の如くなる者』と自ら稱した。しかし其の身に負へる天職につきては『如來の使』たり『法華經の行者として佛語を助くる者』たり、『日本國の棟梁』た

る自信があつた。それ故に其の弟子に對しても決して自己の天職を輕んずべからざるよしを諭し、

兼々申せしが如く、日蓮が弟子等は臆病にては叶ふべからず——教行信證御書

と戒め且勵ました。これは少しく後の事であるが、弟子の三位房日行が文永六年叡山に遊學し、京都の公卿の間に交り結び、關白の持佛堂で説法したのを大なる名譽とし、之を日蓮上人に報じ、關白のことを『上』と書いたとて、上人は之をいたく叱責し、

御持佛堂にて法門申したりしが、面目なんど書かれて候事、かへすく不思議に覺え候。其故は僧となりぬ、其上一閣浮提にありがたき法門なるべし、たとひ等覺の菩薩なりとも何とか思ふべき。……召されたり、上なんど書く上面目なんど申すは、かたぐ詮する所日蓮をいやしみて書けるか。

——法門中可被様之事

とて其の不見識を詰りたる上、更に其の平等の用意に説き及んで、

總じて日蓮が弟子は京に上りぬれば、始は忘れぬやうにて後には天魔つきて物に狂ふ。少輔房が如く、和御房もそれ體になりて、天のにくまれ蒙る。上りていくばくもなきに實名をかうる條物ぐるはし。定めてことばつき音なんごも京なめりになりたるらん。鼠が蝙蝠になりたるやうに、鳥にもあらず鼠にもあらず、田舎法師にもあらず京法師にも似ず少輔房がやうになりぬと覺ゆ。言をばた々田舎ことばにてあるべし。——同上

とあるは頗る痛快である。

多くの人が集らなければ世間を動かすだけの大勢力とはならぬけれども、最初から多数が得られるものではない。たとへ少数なりとも其の團結の力が鞏固

で、外から壊さるゝことが無ければ、次第に大を成し得べきである。若し其の團結が鞏固でなければ、たとへ一時は盛なやうに見えても、久しからずして頽勢に向ふべきである。されば釋尊も之を戒められて、獅子身中の蟲といふ如き譬喩を説かれたのである。日蓮上人が其の一門を戒めて、

剩へ日蓮が弟子の中に異體異心の者これ有れば、例へば城者として城を破るが如し。——生死一大事血脈鈔

といつたのも同じ意である。固より法華經の行者たる人の門下に歸する以上はいかなる迫害にも屈せざる所の覺悟を有すべき筈であるが、凡夫の習ひとして種々の事に出逢へば其の覺悟の緩んで來るのも是非ないことである。此點は上人の最も苦心した所と思はれる。されば松葉ヶ谷に庵室を結んだはじめから、身延山幽棲の終りに至るまで、或は戒め或は勧め、一人でも信心を退轉する者

の無いやうにと努めたさまは、其の遺文の中に歴々として現はれて居る。或は金は大火にも焼けず、大水にも漂はず朽ちず。鐵は水火共に堪へず。賢人は金の如く、愚人は鐵の如し。貴邊豈に眞金にあらずや——生死一大事血脈鈔と稱揚し鼓舞したこともある。或はまた

日蓮御房は師匠にては在せども餘りに剛し、我等は柔に法華經を弘むべしといはんは、螢火が日月を笑ひ、蟻塚が華山を下し、井江が河海をあなづり、鳥鵲が鸞鳳を笑ふなるべし、笑ふなるべし。——佐渡御書

と呵責したこともある。共に弟子を思ふ師の慈悲心より出るものである。

七、立正安國

鎌倉に居を構へてから八年目の文應元年七月に至り、日蓮上人は立正安國論を前執權時頼に呈し、謗法の國に諸難の集るのは當然であると痛論し『早く信仰の寸心を改めて實乗の一善に歸すべき』ことを勧めた。此論の中に豫言せられたる『自界叛逆の難』と『他國侵逼の難』とは、後年に至り一々事實となつて現はれた。但し此の豫言は上人自身の推斷によるものではなく、盡く佛經の旨に基くものである。されば

是れ偏に日蓮の力に非ず、法華經の眞文、聖の感應する所歟。——安國論奥書
とある如く、上人は之によつて愈其の信仰の佛意に合せることを確かめ、廣宣流布の理想の空しからざるべきを知つたのである。

此論のことは上人が幾度も人に語り、武藏池上に於て入滅の前にも特に弟子達を集めて此論の大意を講じたと傳へられてある。斯く上人自身に之を重要視して居たものであるから後世の人が之を重んじたのも道理である。然るに立正安國論の中には日蓮上人の教義ともいふべき事は殆ど説かれてない。又法華經が何故に最勝の經なるかを明にすべき道も殆ど示されてない。此處に上人の用意が存するのである。立正安國論は實に當時の日本國民に對する一大警告文である。『正しい信仰の上に立たなければ國はいつ迄も安穩でないぞ』といふ警告である。然らば正しい信仰とは如何なるものであるかといふ疑問を懷いて、その解決を求むるものが多く出て來れば、それで此論を書いた目的は達せられたわけである。日本國民を覺醒せしむるためには、當時の事情として、先づ武士を覺醒せしめなければならなかつた。武士は政權を握つて居たのみならず、

久しい以前から何事に就ても國民全體の指導者であつた。農民や商人等は殆ど全部が無教育であつて、自分達の一身上の事よりほか何も考へる餘力は無かつた。それ故に武士の指し示すまゝに右へも左へも靡くのである。

武士と雖もあまり充分の教養のある者はなかつた。承久三年五月、義時追討の院宣の下つた時に、鎌倉では義時の姉の政子が多く將士を集めて頼朝以來の恩誼を説き、此の恩誼を忘れて京方へ附くものは心任せにせよといつた。その時に彼等は皆決して二心はもたぬと答へたのである。

是を承はりて有りとある大名小名、皆袖を掩ひ涙を流して申しけるは、心なき鳥獸類までも人の恩ある事を忘れずとこそ承はれ。まして申し候はんや、代々御恩を罷り蒙りぬる上は、向はれ候はん所迄は相向ひ、如何ならん野の末道の邊までも、都をば枕とし關東をば跡にして屍を曝す身とこそ罷

りなり候はんずらめ。争でか偽りを申すべきとて各歸りぬ。——承久記
此の決心を以て彼等は總勢十九萬騎を率て京都に攻め上つたのである。彼等は代々源氏の恩を蒙つて居る故に、この恩に報せんが爲に死せんと誓つた。而して祖先以來蒙つて居る朝家の御恩を忘れ、朝家に對して弓を引いた。そのみならず義時が三上皇の御遷幸を取り計らふに至つても、一人として之を止むる者もなかつた。彼等の理義に暗きことは驚くばかりであるが、畢竟するに學ばざるの致す所であらう。

此の如き武士によつて指導せらるゝ一般國民のいかに理義に暗かつたかは、想像に餘りあることである。何れにしても先づ武士を覺醒させなければならぬが武士の棟梁は北條氏である。北條氏が動けば武士の凡てが動くのである。それ故に日蓮上人は立正安國論を作つて北條氏に呈したのである。時に時頼は執權

をやめて最明寺に居り、嗣子の時宗はなほ幼年であつたので、同族の長時が執權となつて居たが、實權は依然として時頼の手に在つた。而も時頼が佛教に就て熱心なる研究者であり、又信仰者であることは前にいふ通りである。それで上人はその近侍の士なる宿屋左衛門の手を経て、立正安國論を時頼に出したのである。

諫臣國に在れば其國正しく、争子家に在れば其家直し。國家の安危は政道の直否に在り、佛法の邪正は經文の明鏡に依る——興時宗書

といふは上人の終始一貫せる主張である。正法を信する人が國政を執れば國家は安穩にして萬民各その所を得るであらう。而して如何なる教を正法として信すべきかは、經文に示さるゝ所によつて定むべきである。

佛法は獨り僧侶の佛法ではない、社會一般の人の佛法である。佛に成るの道

は此の實社會以外に別に存在するのではない。

一切世間所有の善論は皆此經に因る。若し深く世法を識れば即ち是れ佛法なり。——金光明經

といふは佛法の活社會と離るべからざるものなることを、最もよく證せる語である。經の中に説かれたる所は空理空論ではなく、一々に之を實行して其の効を見るべきものである。若し實際の生活を離れたる信仰が重んぜられて、世のため人のために力を致すことの出来ぬものが佛法の信仰者として自ら許すやうであれば、その信仰は佛の御本意に叶はぬものである。

今無上の正法を以て諸王大臣宰相及び四部の衆に付屬す。正法を毀る者を大臣四部の衆當に苦治すべし。——涅槃經

といふは佛法が實社會の凡ての文物制度と離れぬものであるといふ事を根柢と

し、社會の有力者は佛法の流布のために力を盡すべき責任を有せることを教へられたものである。四部とは比丘(男の出家したもの)比丘尼(女の出家したもの)優婆塞(在家の男にして佛法を信する者)優婆夷(在家の女にして佛法を信する者)をいふのである。其の四部の衆よりも前に「諸王大臣宰相」と數へられたのは、此等の地位に在る人は一般人民を指導すべき者であるから、特に其の覺醒を促されたのである。

抑も釋尊の五十年に亙る説法は此の娑婆世界の一切衆生のためである。娑婆とは梵語であつて、之を譯しては「堪忍」といふ。この世には種々の憂苦が充ち満ちて、之を堪忍しなければ生活することが出来ぬ故に之を娑婆と呼ぶのである。また佛の住みたまふ世界を寂光淨土といふ。寂とは常住にして變化なきの義である。常住にして光明に充ち、清淨にして汚れなき處が佛の住みたまふ世

界である。而も此の世界を娑婆世界より外に求むるには及ばぬのである。唐の妙樂大師が

豈に迦耶を離れて別に常寂を求めん。寂光の外に別に娑婆あるに非ず——法華

文句記

といつたのは能く大乘佛教の精神を發揮せるものである。人々は其の心によつて世界を作つて居る。此の世界が娑婆であるのは、人々の心が煩惱によつて支配されて居るからである。若し人々の心が佛に近いものになれば、其の住む所の世界は寂光淨土に近づくべきに定まつて居る。人々が皆悉く佛のやうな心をもつ時が來れば、寂光淨土は其儘に此の地上に實現せらるべきである。斯く娑婆世界を離れずして寂光淨土を求め得べきことを『娑婆即寂光土』といふのである。法華經の中に

時に十方世界通達無礙にして一佛土の如し。——神力品

とあるは、此の理想の實現せられた時を示すものである。

人々をして皆其の具有せる佛性を開發せしむるために佛の教が與へられたのであるが、人には機根の利鈍の差が様々であるから、一人づつ教へ導いて盡く道に入らしむることは容易でない。茲に於てか社會組織を健全にし社會制裁の力を以て人々をして敢て欲を恣にせしめぬやうにすることが最も肝要である。それには社會を指導する地位に立つ者が先づ佛法に歸依し、その力に依つて凡ての必要なる施設が出来るやうにならなければならぬ。これ釋尊が佛法を國王大臣宰相等に付屬せられたる所以である。

賢王あり、鶏の鳴く時より起きて先づ道場に入り、賢聖を敬禮し福祐を祈り祖宗を祠祭し恩德に報せんことを思ひ、人に孝敬を教へ萬法を冥益す。了り

て後に朝に臨みて諸の大臣と王事を理め事を聴く。此二事了りて後に膳を進む。——華嚴經

と佛の説かれたる如き賢王によつて國が統治せらるゝならば、風教大に興り民俗自ら改まるであらう。而して大臣宰相等は共に賢王の治を輔けて國民を指導すべき責任を負うて居るものである。

大臣宰相等は其の當時に於て國民を指導すべき地位に在りまた其の實力をもつて居た者であるから、釋尊は特に其名をあげて正法を付屬せられたのである。若し今日の世の中ならば、たゞ大臣宰相のみの名を擧げられはしないであらう。又日蓮上人の當時には武臣が四民の指導者であるから、立正安國論を北條氏に進献したのである。若し今日であつたなら無論別の方法によるであらう。今日の社會は獨り政治の要路に立つ人の力のみならず、各方面の人々の協力によつ

て健全なる發達を遂げて行くべきである。されば苟くも周圍の人々に何等かの感化を興へ、何等かの影響を及ぼすべき地位に在る者は、佛の村屬は自分達に對して命せられたものと考へ、日蓮上人の立正安國論は自分達の爲に書かれたものと考へなければならぬ。人々が皆正法に歸依するやうになれば、

然れば則ち三界は皆佛國なり、佛國其れ衰へんや。十方は悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや。國に衰微なく土に破壊なくば、身は是れ安全にして心は是れ禪定ならん——立正安國論

といふ状態が實現さるゝに違ひない。その日の來るまでは決して努力を緩めてはならぬのである。

此の立正安國といふ語は日蓮上人によつて初めて掲げ出されたものであるが、抑も我が日本國に大乘佛敎が弘められたのは此の『立正安國』の精神に基く

ものであるといふも過言ではあるまい。先づ聖徳太子の御精神が即ち立正安國である。太子の攝政として國政を總攬せらるゝに當り佛法の興隆に力を傾けたまへるは、之によつて根本的に民心を革正せられん爲であつた。それは憲法の第二條に『篤く三寶を敬へ』と教へられ、なほ『其れ三寶に歸せずんば何を以てか枉れるを直うせん』と仰せられたのを以て見るも明かである。又憲法の第十條に

忿を絶ち瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心あり、心各執あり。彼是とすれば我非とし、我是とすれば彼非とし、我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず、共に是れ凡夫のみ。是非の理語ぞ能く定むべけん。とて各自に反省することの必要を教へられたる如きも、全く佛教の精神を基礎とせられたるものである。又各自に私心を去つて公のために盡すべきことを

反覆して説かれてあるが、私心とは即ち煩惱である。煩惱を除くの道は佛の遺されたる正法に依るより外はない。

更に太子が大乗經典の中に於て特に重んぜられたものは何であつたかを知るならば、太子の御精神は最も明かになるべきである。太子は朝廷の百官のために法華經と維摩經と勝鬘經との三部の經典を自ら講せられ、又此等三經の義疏を作つて後世に遺された。此等の三部の經典は何れも佛法と實生活との離るべからざることを懇に教へられたるものである。法華經に現はれたる娑婆即寂光土の思想に就ては既にいつた。維摩經は毘耶離城に住する維摩居士が釋尊の諸大弟子と大乘佛教の根本精神に就て問答したことを骨子としたもので、世間を通じて山林に住み悟道を求めんとするの非なることを最も痛切に説いてある。また勝鬘經は勝鬘といふ妙齡の婦人が自ら悟り得た所を釋尊の前に説き、釋尊

が其の能く佛意を得たるを稱讃せらるゝことを記したものである。維摩居士は城中に住する俗人でありながら、大乘佛教の深理を説いて釋尊の諸大弟子をして皆口を閉ぢて傾聴せしめた。勝鬘夫人は妙齡の一女子にして能く佛意を得、その夫なる友稱王をはじめ多くの人々を感化して其國に大乘の教を弘めた。佛法は世法の外に存在するものではない。

聖徳太子が此等の三經を選び出して之を世に弘めたまへるは、即ち立正安國の御精神を以て佛法の興隆に力を盡されたることを證するものである。此時に當つて隋の勢力は實に強大なるものであつた。支那は晋の末から久しく紛亂を續け之を一統するもの無くして殆んど三百年を経たが、隋によつて兎も角も一統せられたのである。而して彼は其の餘力を以て朝鮮を壓し若し吾が國にも乗すべき隙があつたならば如何なる態度に出るかも圖られぬ有様であつた。

其の國書に

皇帝倭皇に問ふ。……朕欽んで寶命を承け區宇に臨御す。徳化を弘めて含靈に覃被せしめんことを思ひ、愛育の情遐邇を隔つることなし。皇は海表に介居し民庶を撫寧し、境内安樂にして風俗融和し、深氣至誠にして遠く朝貢を修む。丹欸の美、朕嘉するあり。

とあるが如き、宛ら屬國に對するが如き語氣である。然るに聖徳太子が之に對する答書を認めらるゝに當り、

東天皇敬ひて西皇帝に白す。使人鴻臚寺の掌客斐世清等至りて久憶方に解けぬ。季秋薄冷、尊候何如。云々

といふ如く全く對等の語を用ひて敢て屈せられなかつたのは、獨り國家の體面を重んぜられたのみではない、彼と對立して敢て遜らぬだけの實力のあること

を確信せられたが爲である。隋の煬帝が此の答書を見て甚だ不快の様子であつたが、その儘にして済したといふは吾が國の侮るべからざることを知つて居たからであらう。聖徳太子が民心を正しくすることを以て國運發展の根本としたまひ、身を以て衆を率ゐて努力を重ねたまへる結果は、斯の如く明かに現はれ來つたのである。

太子の御時より二百年許を経て傳教大師が出て法華經を弘めた。大師もまた立正安國といふ語は用ゐなかつたけれども、その精神は立正安國に在つた。大師は法華經の外に仁王經と金光明經とを選び出し、併せて之を鎮護國家の三部經として世に弘め、また其の註を作つて後世に遺した。仁王とは即ち佛の正法に基いて國を治むる王のことである。仁王經は斯る仁王の國に慶福の多かるべきことを説くと共に、正法の廢れたる國に災禍の絶え間なく起るべきことを説

いて戒められたものである。金光明とは即ち佛の具へたまへる徳を形容したるものである。金光明經は佛の正法の行はるゝ國を諸天善神の共に護るべきことを説き、若し正法廢れて諸天善神皆此國を棄てたる時は災禍相次いで起るべきことを説かれたるものである。傳教大師が此の二經を法華經と共に世に弘めたのは、即ち正法を立て國土を安んずるの意に出ること極めて明かである。人佛教を壞らば復た孝子無く、六親和せずして天龍も祐けず、疾疫惡鬼日に來りて侵害し、災怪首尾し連禍縱横せん。——仁王經

とある如く、國土の安穩も風教の興振を皆佛法を其の根柢とすべきものである。此の金光明經は奈良朝の頃から重んぜられたもので、諸國に置かれたる國分寺に於ては皆此經を講せしめられた。又宮中に於て毎年仁王會を營み、仁王經を講せしめらるゝことも齋明天皇の御宇以來の習はしであつた。後には其等の

事が皆形式的になつてしまつたが、最初には何れも佛の正法を本として國土を治めやうとの御趣意に出たもので、傳教大師は御歴代の佛法を重んぜらるゝ御精神を最もよく發揮した者といふべきであらう。時宛も桓武天皇の如き英主の御代に當つたので、佛法と王法と共に盛に興つて國威は著しく伸張した蝦夷が朝廷に歸順して東方に騷亂の絶えたのも此時である。渤海が入貢したのも此時である。此より後佛法も王法も共に衰ふるに及んでは、(寺や塔の数が多くなつても佛の御本意に遠ざかつたのは佛法の衰微と稱すべきものである。)國勢は萎靡して振はず、藤原氏一門が政權を私して庶民の難澁日に甚しきに至つたことは前に説いた通りである。日蓮上人が教の正邪を匡す必要を力説して、身の爲に之を申さず、神のため君のため國のため一切衆生の爲に言上せしむる所なり。——興北條時宗書

といつたのは道理である。正法に依らずして人心を正しくすることは出来ぬ、人心を正しくせずして國土を安穩ならしむることは出来ぬ。

但し立正安國の主張と、或る政治家が民心を懐くる方法として宗教を利用するの混同してはならぬ。宗教を利用するが如きは宗教を輕侮するの甚しきものである。吾々が信仰を求むるのは何等かの目的を達するための手段として無く、吾々の心の底から自然に湧き起る所の、已み難き要求を満足せしめんが爲でなければならぬ。然らざれば信仰に眞の生命のあらう筈はない。立正安國の主張は佛法を王法の役に立てやうといふのではなく、佛法と王法との冥合を理想とするのである。冥合とは自然に相合致し相融合するの謂である。人は其の本性として、孤立して存在すべきものでなく、共に活き共に住み、相俟ち相扶けて進むべきものである。(此事に就てはなほ後に委しくいふつもりである)

る。それ故に一身の憂悶を除き一己の苦惱を去つて、清淨にして安穩なる生を送り得たとして、決して其心に眞の満足が得らるゝものではない。一切衆生と共に道を樂み得るに至つて初めて眞の満足を感じ得べきである。國土の安穩を外にして一身一己の安穩を求めんとするは、人の本性に背いたる企てなのである。大乘佛教は實に此處に立脚してゐるもので、眞に大乘佛教を信するものは必ず立正安國の主張に一致すべきである。

日蓮上人の立正安國論は、前にいふ如く日本國民に對する警告文に外ならぬものである。凡ての災禍を『日本國民に對して與へられたる天の警告』であると解し、國民が疾く此の警告に目覺めて正しい信仰を求むべきことを、最も痛切に勧めたものである。これ『如來の使』を以て自ら任ずる上人の當然の職責であると感じたからである。日蓮上人の教義を知らんとして立正安國論を讀むなら

ば、全く失望に終るであらうが、法華經の行者たる者は國家の大事に際して如何なる態度に出づべきであるかを知らんとすれば、立正安國論を讀んで必ずや大なる感激を得べきである。

八、廣宣流布の時

日蓮上人の少年の頃よりして頻々として起つた天災地變は、上人が鎌倉に居を定めて後愈々甚しくなつた。殊に康元元年(上人三十五歳)には春にも秋にも暴風雨に續いて洪水があつた。正嘉元年(三十六歳)に入つては夏大に旱魃で地震があり、秋に至つては更に恐ろしい地震が再度もあつた。同二年には秋に大風と洪水とがあつた。翌正元元年(三十八歳)には饑饉と疫病との爲に生命を失ふ者夥しく、歳を超えてもなほ止まなかつた。此等の天災地變を攘はんが爲に、京鎌倉をはじめとして各地の神社佛閣に於て、頻りと祈禱が行はれたが更に其の驗は無かつた。此の出來事を眼前に見て、上人は今迄に究め盡したる經論の本文に思ひ合せ、愈々法華經の行者の奮ひ起つべき時であることを痛感した。

た。

法華經は印度から支那を経て吾國に傳はり今や正に其の廣宣流布すべき時機に際したのである。此時に當つて此經が先づ吾が日本國に弘まるならば、やがて月氏漢土乃至は一閻浮提に弘まることにもなるであらう。されば日本國民に『是非とも法華經を信じなければならぬ』といふ自覺を起さすことが、第一に肝要なる事である。斯く考へて見ると、頻年の天變地天に極めて深い意義が認めらるゝのである。これは正しい信仰を失つた者に對する天の戒めである。斯る戒めが與へらるゝといふは、即ち日本國民が大なる天職を有することの證據でなければならぬ。若し覺醒さすする必要もなく、奮起せしむる必要もないやうな價値の無い國民であるならば、何の呵責も警告も加へられずして已むであらう。本來は貴い性質を具へたものが、偶其道を誤つて居る故に、その誤りを匡して

其の本來の性質に立返らせやうといふ天意によつて、種々の警告が加へらるゝのである。されば眼前の災禍はまことに悲むべく悼むべきものであるが、決して之が爲に失望落膽すること無く、たゞ此の機會に於て日本國民の覺醒を一日も速ならしめん爲に努力すべきのみである。

法華經を弘むる者は日本國の一切衆生の父母なり。章安大師云く、彼が爲に惡を除くは即ち是れ彼が親なり等云々。——撰時鈔

といふのが即ち此時に於ける日蓮上人の確信であつた。

此の如き信念を以て凡ての事變に對するならば、如何なる場合に於ても決して力を失ふことは無いであらう。六百餘年のむかしばかりでは無い、今日に於ても又今後に於ても、吾が日本國には種々の災難が襲ひ來ることであらう。しかし吾々は是れ『大なる天職を有する國民』の自覺を促さんが爲に、天より與へ

られたる警告なりと解して、いつも自ら顧み自ら戒むると共に、愈々勇猛精進の力を養ふべきである。孟子は豪傑の士が常に貧賤の中より出たることを歴舉して、

故に天の將に大任を是人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦め其の筋骨を勞し、其の體膚を餓やしその身を空乏にし、行ひその爲す所に拂亂す。心を動かして性を忍びその能くせざる所を會益する所以なり。人恒に過ちて然る後に能く改む。心に困し慮に衡し而る後に作る。色に徴し聲に發し而る後に喩る。入ては則ち法家拂士無く、出ては則ち敵國外患無ければ國恒に亡ぶ。然る後に憂患に生じて安樂に死することを知る。

といつたが尤も吾々に適切なる言である。安樂は死の途である、憂患は生の途である、吾々は憂患の多きを歎かずして、たゞ憂歎を越え得べき力を養はんこ

を思ふべきである。

日蓮上人は天性最も情に敦い人であつた。されば連年の天災地變によつて、多くの人々が限りなき患苦に悩むを見ては、之が爲に深く心を痛めた。殊に斯る天災地變の起る原因を知る者が世間に無いのを見て、一層の悼ましさを感じた。

獨り此事を愁へて胸臆に憤悱す。——立正安國論

とは此感を漏したる語である。しかしながら上人は此の日本國を中心として、世界に法華經の弘まる時が必ず來るべきことを確信して居た。而して斯る機運の開かるゝ前には、必ず此の日本國に國民全體の覺醒を促すやうな、非常なる出來事が起らなければならぬと考へて居た。されば連年の天災を皆『廣宣流布の時機の近づける前兆』と解して、疾く之を國民全體に自覺せしめんことを思

ひ立ち、立正安國論を撰述したのである。

佛記に順じて之を勘ふるに、既に後五百歲に相當れり。佛法必ず東土の日本より出づべき也。其前相として必ず正像に超過する天變地天これ有る歟。……去る正嘉年中より今年に至るまで或は大地震、或は大天變、宛も佛陀の生滅の時の如し。……當に知るべし通途世間の吉凶の大瑞には非るべし、惟れ偏に此大法興廢の大瑞なり。天台云く、雨の猛きを見て龍の大なるを知り華の盛なるを見て池の深きを知る等云々。妙樂の云く、智人は起を知り、蛇は自ら蛇を知る等云々。日蓮この道理を存じて既に二十一年なり。——顯佛未來記

とは上人が文永十年に至つて記せる所である。即ち上人の信する所の終始一貫せるを知るべきである。

但し何事を論斷するにも偏に經論の文に據り敢て私見を加へぬといふのが上人の態度である。即ち

宗々互に權を諍ふ、予此をあらそはず但だ經に任すべし。——開日鈔

の言ある所以である。故に自ら信する所を更に經論に就て確めんが爲に、立正安國論の稿を起す前に駿河岩本の實相寺の經藏に入り、一切經を覆讀したのである。上人が大膽なる主張には、いつも慎重なる用意の伴つて居たことを知らなければならぬ。所謂「根深ければ枝繁し、源遠ければ流長し」とはこれである。さて實相寺に於ける研究は愈上人の所信を固めしむるものであつたので、上人は愈意を決して立正安國論の稿を起し稿成て後に大學三郎に字句の修正を求め、之を前執權時頼に呈したのは文應元年七月十六日である。

日蓮世間の體を見て粗ば一切經を勘ふるに、御祈請驗なく還て凶惡を増長す

るの山、道理文證之を得了んぬ。終に止むこと無く勘文一通を造作して其名を立正安國論と號す。文應元年七月十六日、屋戸野入道に付して故最明寺入道殿に進め申し了んぬ。此れ偏に國士の恩に報せんが爲也。——安國論御勸由來と上人の自ら記する所によつて、其の時の事情はよく分る。「國士の恩に報せんが爲」といふは眞に法華經の行者の語である。

立正安國論は旅客の來つて近年の天災地變を歎くに端を發し、凡そ十段の問答を作り設けて次第に論旨を進め、國難を除かんが爲には必ず法華經に歸依し謗法の諸宗を禁すべきことを勧めたるものである。而して之を論斷するには一々諸經の文を引いて證とし、専ら佛意によるもので更に私見を加へぬことを明にしてある。諸經の中に、正法の廢れたる國には種々なる災禍の起るべきことを説かれたのに、大集經には三災を擧げ、仁王經と藥師經には各七難を擧

げ、金光明經には種々の災禍を擧げてある。其の多くは天變地天であるが、一々皆此の數年間に事實になつて現はれた。唯だ藥師經の中に、

佗國侵逼の難。自界叛逆の難。

と數へたのと、大集經の中に、

其王教令するも人隨從せず、常に隣國の爲に侵繞せられん。

とあると、金光明經の中に

多く佗方の賊有りて國內を侵掠せん。

とあると、仁王經の中に、

四方の賊來りて國を侵し、内外の賊起り、火賊水賊風賊鬼賊ありて百姓荒亂

し、刀兵劫起せん。

とあるとが未だ現はれ來らなかつたのである。故に上人は

若し先づ國土を安んじて現當を祈らんと欲せば、速に情慮を回らし怨ぎ對治を加へよ。……先難是れ明なり、後災何ぞ疑はん。若し殘る所の難、惡法の科によりて並び起り競ひ來らば其時何をか爲んや。

とて、必ず天變地天以上の大國難の起り來るべきことを警告したのである。

既にいへる如く北條氏歴代の中でも、殊に時頼父子は佛法を信すること篤き者であつた。又時頼は民を憐むの念深く、執權を罷めて後には微服して諸國を巡行し民情を視察し且地方の官吏などに邪曲の行ひなきかを探つたとの傳説もある程である。然るに連年の災禍によつて民の疾苦は愈甚しくなつたのを見て、大に心を悩まして居たことであらう。されば若し虛心坦懷にして此の立正安國論をよみ、上人の

何ぞ同じく信心の力を以て邪義の詞を宗めんや。

と諫め、また大集經の中の

若し國土ありて無量世に於て施戒慧を修すとも我が法の滅せんを見て捨て擁護せずんば是の如くに種ゆる所の無量の善根は悉く皆滅失せん。

といふ語の引用されたのを見ては、大に思ひ當らなければならぬ事である。而も時頼は久しい因習に囚はれて悟る所が無かつたのか、但しは日蓮上人を名も無い一僧徒と侮つてか、此の忠誠なる諫言に耳を傾けやうとはしなかつた。

上人は之に屈せずして、なほ諸宗に對する折伏を續けた。之に憤激した諸宗の徒は此年の八月二十七日、夜に紛れて上人の庵を襲うたが、上人は身を以て脱することが出来た。此より暫く房總地方を巡遊する間に多くの有力なる信徒を得た。秋元太郎、曾谷教信、大田乗明等は其の尤なる者である。六老僧の一人なる日興もまた此間に門下に屬した。半歳ばかりの旅を終つて翌弘長元年

の春、上人はまた鎌倉へ歸つたが、諸宗の徒の迫害は愈甚しく、終に執權長時の計らひとして上人を伊豆へ流した。上人は後に當時の事を追懐して、

先づ大地震に付て、去る正嘉元年に書を一卷注したりしを、故最明寺の入道殿に奉る。御尋ねもなく御用ゐるもなかりしかば、國主の御用ゐなき法師なれば、あやまちたりとも科あらじと思ひけん、念佛者並に檀那、又さるべき人々も同意したることを聞えし。夜中に日蓮が小庵に數千人押寄せて殺害せんとせしかども、いかんがしたりけん其夜の害もまぬがれぬ。されども心を合せたる事なれば、寄せたる者も科なくて、大事の政道を破る日蓮が生きたる不思議なりとて伊豆の國へ流しぬ。されば人のあまりに悪きには我が亡ぶべきとがをも顧みざるか、御式目をも破らるゝか。御起請文を見るに、梵釋四天、天照太神正八幡等を書きのせ奉る余存外の法門を申さば、仔細を辨

へられずば日本國の御歸依の僧等に召合せられて、其れになほ事ゆかずば漢士月氏までも尋ねらるべし。其も叶はずば、仔細ありなるとて且らく待たるべし。仔細も辨へぬ人々が身の亡ぶべきをまさしおきて、大事の起請を破らるゝ事心得られず。——下山御消息

どいつたのは如何にも道理ある言である。

大體鎌倉の政道は三代の執權北條泰時が貞永元年に制定したる式目五十一箇條に基いて行はるゝものである。私に徒黨を組んで夜討などをした者に制裁を加へらるべきことは式目に照して明である。又日蓮上人を伊豆へ流したの式目の何れの條に依るものか、更に分明でない。此の式目の末尾には泰時以下十三人が連署して『其中若し一事たりと雖も曲折を存し違犯せしめば』云々とて、梵天帝釋はじめ大小の神祇の罰を蒙るべきよし誓文が載せてある。之に

違背したる處置は自ら滅亡を招くの覺悟であるかといふ、上人の批評は頗る適切である。又上人は自分の主張を直ちに信せよといふのではない。諸宗の僧等を召し合せて對論せしめて、日蓮の主張と諸宗の説く所と何れが正しいかを明にし、然る後に就く所を定めよといふのである。是れは涅槃經に『法に依りて人に依らざれ』とあるに基くものである。説く人の地位や勢力にはいか程の等差があつても、説く所は共に佛の法である。其の何れが佛意を得たりやを知るには、之を對論せしめて公正なる判断を下すに如くはない。殊には彼の桓武天皇の御代に於て、傳教大師をして南都六宗の僧等と對論せしめたる前例もあることである。

若し日蓮上人の唱ふる所が邪義ならば、斯様な方法によつて其の邪義たることを明にして、然る後に制裁を加へらるべきものである。若し對論によつて

も決し難くば、他國にまでも渡つて之を決すべき道を求むべきである。それも出来ぬならば暫く處置を差控ふるのが當然である。然るに其の説の正邪を究めずして理不盡なる壓迫を加へたのは、北條氏の處置が飽くまでも不當である。日蓮上人が之に對しての批評は實に正々堂々たるものである。上人は此より後にも諸宗との對論を主張し、

所詮は萬祈を抛て諸宗を御前に召合せて、佛法の邪正を決し給へ、澗底の長松を未だ知らざるは良匠の誤り、閻中の錦衣を未だ見ざるは愚人の失なり。三國佛法の分別に於ては殿前に在り。所謂阿闍世陳隋桓武是なり。——興北條時

宗書

といふが如くに論じて居る。阿闍世王は提婆達多に惑はされて惡虐の行ひを重ねたが、後には邪法を捨て釋尊に歸依した。陳隋の世には南三北七等、佛法の諸

流派が對立して居たが、天台大師の正義が勝を制した。桓武天皇の御宇に傳教大師が法華經を弘めたことは前にいふ通りである。苟くも四民の上に立ち、國家の盛衰隆替の責任を身に負ふ者は、いつも正法の興隆に力を致すべきものである。

日蓮上人は『日本の柱』となるべき抱負を以て世に立つたのであるが、其の誠忠は當世に容れられず、罪なくして伊豆の伊東へ配流の身となつた。

世末になりて候へば、妻子を帶して候。比丘も人の歸依を受け、魚鳥を服する僧もさてこそ候か。日蓮はさせる妻子も帶せず魚鳥をも服せず、たゞ法華經を弘めんとする失によりて、妻子を帶せずして犯僧の名四海に滿ち、螻蟻をも殺さゞれども惡名一天に彌れり。恐らくは在世に釋尊を諸の外道が毀り奉りしに似たり。——四恩鈔

といふ述懐も無理ならぬことである。但し宋の蘇東坡は韓退之を評して、人至らざる所無し、惟だ天は偽を容れず。智は以て王公を欺く可きも、以て豚魚を欺く可からず。力は以て天下を得可きも、以て匹夫匹婦の心を得可からず。……蓋し公の能くする所の者は天なり、其の能くせざる所の者は人なり。——韓文公碑

といったのは萬古に亙つて動すべからざる真理である。身を容るゝに所なきまでになつた日蓮上人は、伊豆の配所に在る間に『諸天晝夜に常に法の爲の故に而も之を衛護す』といふ經文の空しからぬことを知つた。

最初に上人に歸依した者は川奈の漁夫なる彌三郎であつた。彌三郎は念佛の信者であつたが、上人の危難を救つたのが縁となつて、最も熱心なる法華經の行者となつた。上人を配所へ送つて行つた士卒等は、伊東の代官に引渡して歸

るべき掟を無視し、上人を海岸に近い巖石の上に棄て置いて船をかへした。満潮と共に上人は溺れ死すべきであつたが、折ふし其側を漁船を浮べて通りかゝつた彌三郎が之を救ひ、其家に伴ひ歸つて懇に待遇した。法華經の法師品には、此經を弘むる法師の在る所には清信の士女が來つて供養し又衛護すべきよしを示されてある。上人は此の經文を思ひ合せて、

法華經を行せん者をば、諸天善神等或は男となり或は女となり、形をかへ様々に供養して助くべしといふ經文なり。彌三郎殿夫婦の士女と生れて日蓮法師を供養する事疑ひなし。——船守彌三郎許御書

と感謝して居る。而して彌三郎夫婦はたゞ上人の生命を救つたのみならず、上人の教を受けて深く心服し、其の一村の人々の迫害が身に及ぶべきことを覺悟して上人の門に入つたのである。上人が其志に感じて、

凡夫即佛なり、佛即凡夫なり。一念三千我實成佛これなり。然らば夫婦二人は教主大覺世尊の生れがはり給ひて日蓮をたすけ給ふか。——同上

とまでいつたのは、人の力を以て如何に壓迫しても、法華經の弘まるべき機運を阻止し盡すことの出来ぬと知つて、今更ながらに貴く覺えた爲であらう。

又地頭の伊東朝高もはじめは念佛の信者であつた爲に、上人を悪んで居たのであるが、病に罹つて久しく癒えず、上人の祈禱を請うて快くなつてから、心を翻して法華經を信するやうになつた。此より前に此の伊東の海中から漁夫の網にかゝつて現はれた釋尊の尊像があつたのを、地頭の家で藏して居たが彌陀を信する者の習ひとして更に崇め尊ぶこともしなかつた。朝高は此の像を改めて上人に贈つた。

終に病惱なをり、海中いろくづの中より出現の佛體を日蓮に賜はる事この病

惱の故なり。定めて十羅刹女のせめなり。此功德も夫婦二人の功德となるべし。——船守彌三郎許御書

と上人は彌三郎に報じた。海に溺れて死すべかりし身が死せずして、却て海中より出現したる佛像を拜するに至れるも、法華經の徳といふべきであらう。

若し人は是の徳を具して或は四衆の爲に説き、空處にして經を讀誦せば、皆我身を見ることを得ん。——法師品

と佛の仰せ置かれたのも空言でない、思ひ當つたに違ひない。

殊に悦ぶべきは伊豆葦山の郷士、江川吉久の歸依したことである。江川氏の祖は大和に住したが、保元の亂に崇徳上皇の御味方に參り、戦敗れて後關東に落ち伊豆の葦山に居を定めたのである。吉久は四條金吾と親交があつたので日蓮上人の伊豆配流の際に『謫居中萬事の世話を頼む』といふ金吾からの依頼に

より、態々伊東へ来て上人に面會した。ところが吉久は一見して忽ち上人の高風に對して渴仰の念を生じ、此より屢々配所を訪うて終に其の門下に屬する事となつた。江川氏は爾來今日まで六百數十年の間男系を以て相續して、代々法華經の信仰を承け繼いで居る。徳川幕府の末期に出た太郎左衛門英龍の如きも堅固なる信仰をもつて居た。(此の江川氏の事は從來の傳説と大に異つて居る。これは余が江川家に就て直接に聞いた所である。)日蓮上人が伊東の配所に居たのは弘長元年五月から翌々年の三年二月まで、凡そ一年半あまりの間であるが斯く頼もしい信徒を得て上人は愈々廣宣流布の日の近づくといふ自信を固うした。

鎌倉の松葉ヶ谷に庵を結んでから九年越し、殆んど席の暖まる暇もなくして過したが、伊東の配所に閑居して靜かに波の音を聞きながら此の數年間に受けたる迫害の數々を回想すれば、まことに感慨無量なるものがある。

是れ偏に法華經を信する事の、餘人よりも少く經文の如く信をもむけたる故に、惡鬼其身に入てそねみをなすかと覺え候へば、是程の卑賤無智無戒の者の二千餘年已前に説かれて候法華經の文にのせられて、留難に値ふべしと佛記し置かれ參らせて候事のうれしさ申盡し難く候。——四思鈔

といふは其の心の底より出たる告白である。難にあふ毎に自身が『廣宣流布に魁する者』であるといふ確信が加はつて行くのである。さればこそ。

此身に學文つかまつりし事やうやく二十四五年にまかりなる也。法華經を殊に信じ參らせ候ひし事はわづかに此六七年よりこのかた也。又信じて候ひしかども懈怠の身たる上、或は學文と云ひ或は世間の事にさへられて、一日にわづかに一卷一品題目ばかり也。去年の五月十二日より今年正月十六日に至

るまで二百四十餘日の程は、晝夜十二時に法華經を修行し奉ると存じ候其故は法華經の故に斯る身となりて候へば、行住坐臥に法華經を讀み行するにてこそ候へ。人間に生を受けて是程の悦びは何事か候べき。——四恩鈔との語も發せらるゝのである。眞にこれ法華經の行者の境界である。

斯る不思議なる法華經の行者の住處なれば、いかでか靈山淨土に劣るべき法妙なるが故に人貴し、人貴きが故に處貴しと申すは是なり。——南條兵衛七郎殿御返事

といふが如き念をもてば、到る處に身を安んずべき境はある。人間の利害得失の如き、固より心を動すべき力のあるものではない。

九、不惜身命の人

伊豆の配流は弘長三年の二月に終り、日蓮上人はまた鎌倉へ歸つた。あくる文永元年、上人は四十三歳となつたが、勸持品に所謂『及び刀杖を加ふる者』の難は此年に至つて上人の身に實現した。それは世に小松原の法難として知らるゝものである。日蓮上人の父は正嘉二年（上人三十七歳）に没したが、母はなほ健在であつた。その母が此頃になつて老病に惱むと聞いて、問ひ慰めんが爲に安房へ歸郷したのである。上人は法華經の行者として起つべき決心をする際に或は之が爲に父母の身に危害の及ばんことを恐れて暫く躊躇したやうであつたが、幸にも兩親には格別の難もなく、共に上人の感化を受け法華經を信するやうになつたのは、上人の大なる悦びであつたらうと思はれる。『豫言者は故

郷に容れられぬ」といふことを耶蘇はいつて居る。それは多くの場合に於て眞實である。幼年の時の事などを知つて居る者を心服せしむるのは、確かに難事に違ひない。然るに釋尊は成道の後に至り、

我もと出家して父の王の爲に誓ふらく、若し佛道を得ば還りて父母を度せん。今已に佛道を得て徳已に成れり。必らず當に國に還りて本誓に違はざるべし。——菩薩經

とて國へ歸つて父王をはじめ叔母の橋曇彌、妻の耶輸多羅、子の羅睺羅その他多くの臣下に教へて、共に佛門に入らしめた。これ釋尊の徳の非常に高く在せることを證するものである。日蓮上人もまた父母を導いて同じ法華經の信仰に入らしめ、又幼い時から世話を受けた富木常忍夫婦の如きをも感化した。以て其の人となりを想ふべきである。

上人が郷に歸つたのは文永元年八月であつたが、母の病はやゝ輕快に赴いたので、心を安うしてなほ暫く滯留し、房總の間に教を弘めて居た。然るに地頭の東條景信は前年から上人を惡んで居たが、殊に清澄寺に壓迫を加へ其の山林等を横領しやうと企てたのを、上人等に氣附かれて問註所へ訴へられた爲終に志を達し得ず、愈遺恨を重ねて居た。それで今回上人が歸郷したので好機として之を除かんと圖り、隙を窺つて居た。十一月の十一日、上人は數人の弟子と共に小松原を通りかゝつたが、兼て附け覬つてゐた景信は多勢を以て之を圍み、弟子の鏡忍は討たれて死し、上人もまた傷を蒙つた。此の急報を聞いて來り救うた天津の城主工藤吉隆もまた討たれて死んだ。

今年も十一月十一日、安房國東條の松原と申す大路にして、申酉の時數百人の念佛等に待ちかけられ候て、日蓮は唯一人、十人ばかり、物の用にあふ者

はわづかに三四人なり。射る箭は雨の如し、打つ太刀は電の如し。弟子一人は當坐に討取られ二人は大事の傷にて候。自身もきられ打たれ、結句にて候ひし程に、いかゞ候ひけん打漏されて今まで生きてはべり。——南條兵衛七郎殿御書

とは上人自ら當時の状況を報じたる消息中の一節である。

斯る大難にあふことも、自身が法華經を弘むべき大任を負ふことの證であると思へば、勇氣は愈加はるばかりである。天台も傳教も斯る難には曾て値はなかつた。

いよく法華經こそ信心まさり候へ。第四卷に云く、而此經者、如來現在、猶多怨嫉一況滅度後。第五卷に云く、一切世間、多怨難信等云々。日本國に法華經よみ學する人これ多し。人の妻をねらひ盜み等にて打ちはらるゝ人

は多けれども、法華經の故にあやまたるゝ人は一人もなし。されば日本國の持經者は未だ此經文にはあはせ給はず、唯日蓮一人こそ讀みはべれ。我不愛二身命、但惜二無上道一是なり。されば日蓮は日本第一の法華經の行者なり。——同上

とは難に値ふによつて又新に感じたる悦びを語るものである。此より後二三年の間は、或は房總を歴遊し、或は鎌倉に歸り、法を弘むるに餘念なかつたが曩に立正安國論の中に豫言したる國難の實現すべき日は漸く近づいて來た。それは蒙古の壓迫である。

此時の蒙古王は有名なる忽必烈であつた。彼の祖父の鐵木眞は非常なる英傑で、其の一代に於て蒙古の版圖は頗る洪大なものになつたが、忽必烈は祖父以上の材幹をもつて生れた。彼は最初その兄を輔けて領土の擴張に努めて居たが

兄の死するに及んで自ら王となり、在位三十四年の間に宋を滅して支那の全領土を其國とし、國號を元といつた。なほ其の領土は支那に止まらず、亞細亞の大部分と東歐羅巴までも包容したる、實に驚くべきものであつた。此の如き勢ひであつたから朝鮮が其の下に屈してしまつたのは言ふ迄もない。彼は斯の如き勢ひに乗じて吾國に臨んだのである。最初は文永三年（此時宋はなほ存在してゐたが、事實上滅亡に近いものであつたのである）、其臣黑的等を吾國に使用せしめたが、航海が困難なために引返してしまつた。それで改めて文永五年に高麗王禎をしてその國書を吾國に致さしめた。此の國書は吾に服屬を勧め、若し肯かなければ干戈に訴へやうと脅迫したものである。其の到達したのは正月十八日であつたが、朝廷よりは早速に伊勢の大廟、この他諸國の山陵に使を派して國難を告げられ、又諸社に於て祈禱をなさしめた。鎌倉に於ては北條政村

が執權であつたが、此年三月より時宗が代つて執權の職に就いた。時に十八歳であつた。

時宗は斷然彼の無禮なる勸めに従はぬ決心をした。假令國運を賭して戦ふとも、國威を傷くるやうな事をしてはならぬといふ意見で、着々として防戦の準備をした。彼は父の時頼にも勝るほどの佛法の信者であつた。而して其の人物の偉大であつたことは宋僧子元が其死後に、

齒四十に満たずして功業を成就すること却つて七十歳の人の上に在り。看よ他の國を治め天下を平定する、喜怒の色あるを見ず、矜誇街耀の氣象あるを見ず、……奇なる哉此の力量あり、此れ亦佛法中再來の人なり。

といつたので能く悉して居る。此の文永五年春から弘安四年夏まで凡そ十四年間、軍國の大事に當つて居たのであるが、其の忙しい中でも經を讀み教を聽く